

たに あい 谷間の縄文人

木崎 康弘

熊本県立装飾古墳館 主幹（学芸課長）

1 はじめに

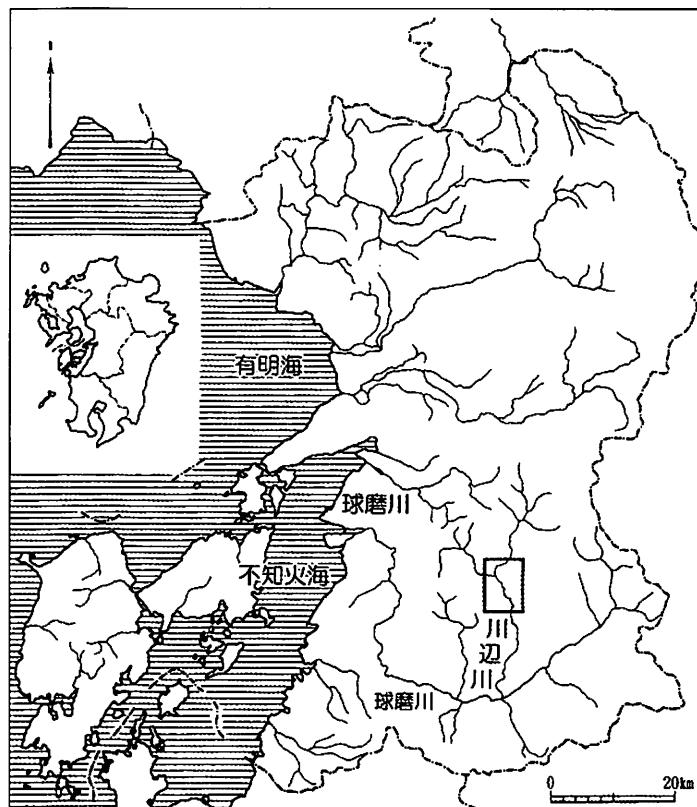
九州の中央部には、祖母山（1756m）を最高峰に、国見岳（1739m）や市房山（1721m）、傾山（1602m）など、1000m級の山々が連なりながら北東から南西にのびる九州山地がある。雨量が多く、温暖な気候で、樹木の生育に適し、様々な生き物が巣くう、豊かな森を育んでいる。その様は、どこまでも奥深い。また、そこは、西側の斜面を流れ下る球磨川や緑川、東側の斜面を流れ下る一つ瀬川や耳川、五ヶ瀬川など、大小の河川の流れが始まるところもある。

そんな九州山地の中を流れる川は、うねりうねりしながら、蜘蛛の巣のようにのびた、V字形の深い渓谷の中を、大小さまざまな岩のまわりでしぶきを上げたり、岩を喰んだりしながら流れ下っている。その流れは、激しくもあり、清らかでもあり、涼やかでもある。球磨川の支流の中、もっとも流域面積の広い川辺川は、そんな川の1つである。

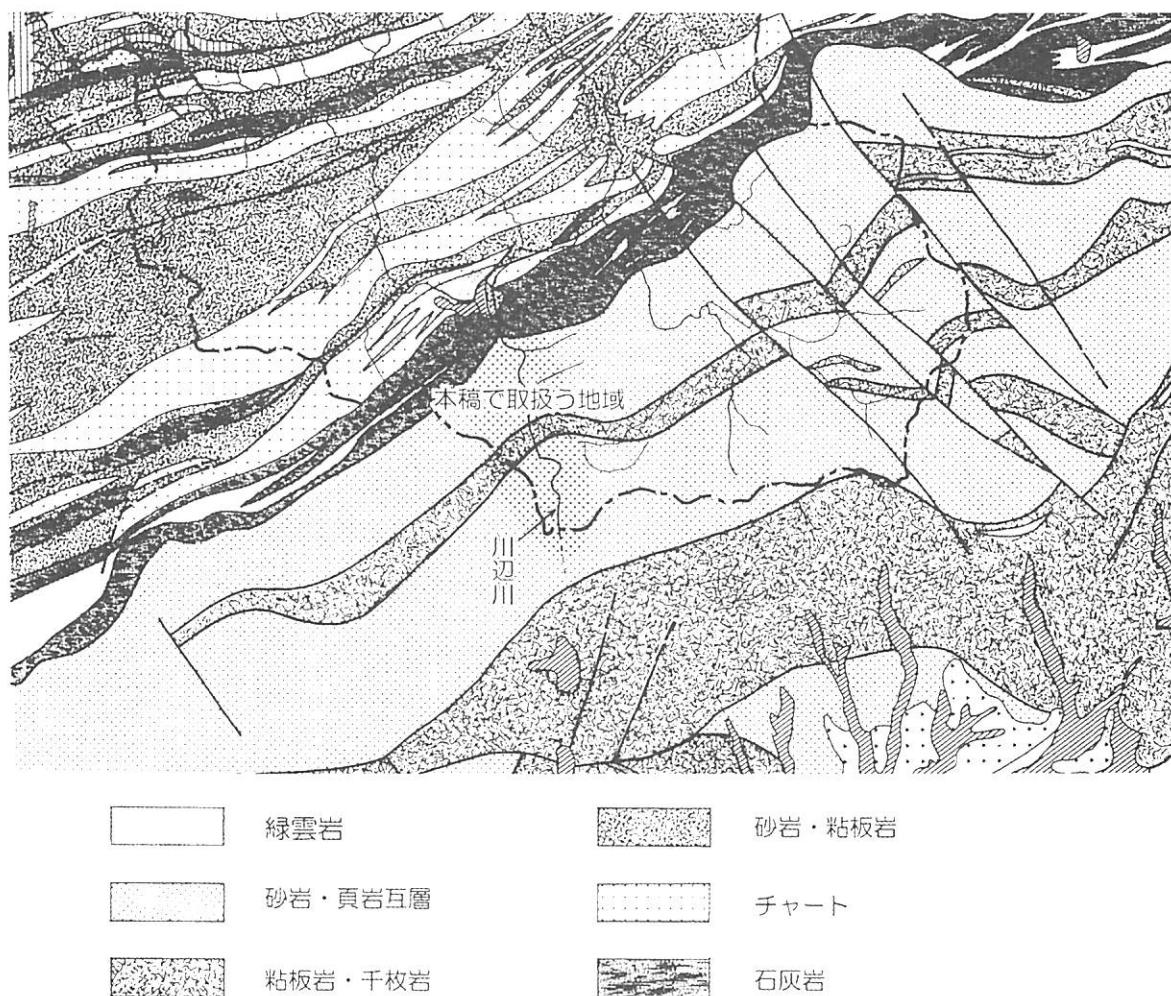
この川辺川は、九州山地中に大きく口を開けた人吉盆地内で球磨川と合流する（第1図）が、上流へと行くにしたがい、わずかばかりの沖積地をさらに狭めながら、壯年期の山容を呈するといわれる九州山地中に切り込んでいく。それがV字谷の五木谷である。

この五木谷一帯には九州地方を北東から南西へと延びる大坂間構造線が走っているが、これによって周辺の地質は、構造線の北側の秩父帯とその南側の四万十帯に区分されるという。秩父帯では砂岩や粘板岩、石灰岩、チャートなどが産し、四万十帯では砂岩や粘板岩が産する（第2図）。こうした五木谷一帯は、先史時代の人類にとって石器石材を供給してくれる、魅力的でありがたい石材産地であった。

ところで、こうした川辺川沿いの五木谷には、先史時代の人類にとって、豊かな森、清らかな水が流れる川、魅力的でありがたい石材産地に裏打ちされてか、約2万年前の先土器時代までさかのぼる人類の足跡があった。そのもっとも古い足跡が、



第1図 熊本県と五木谷



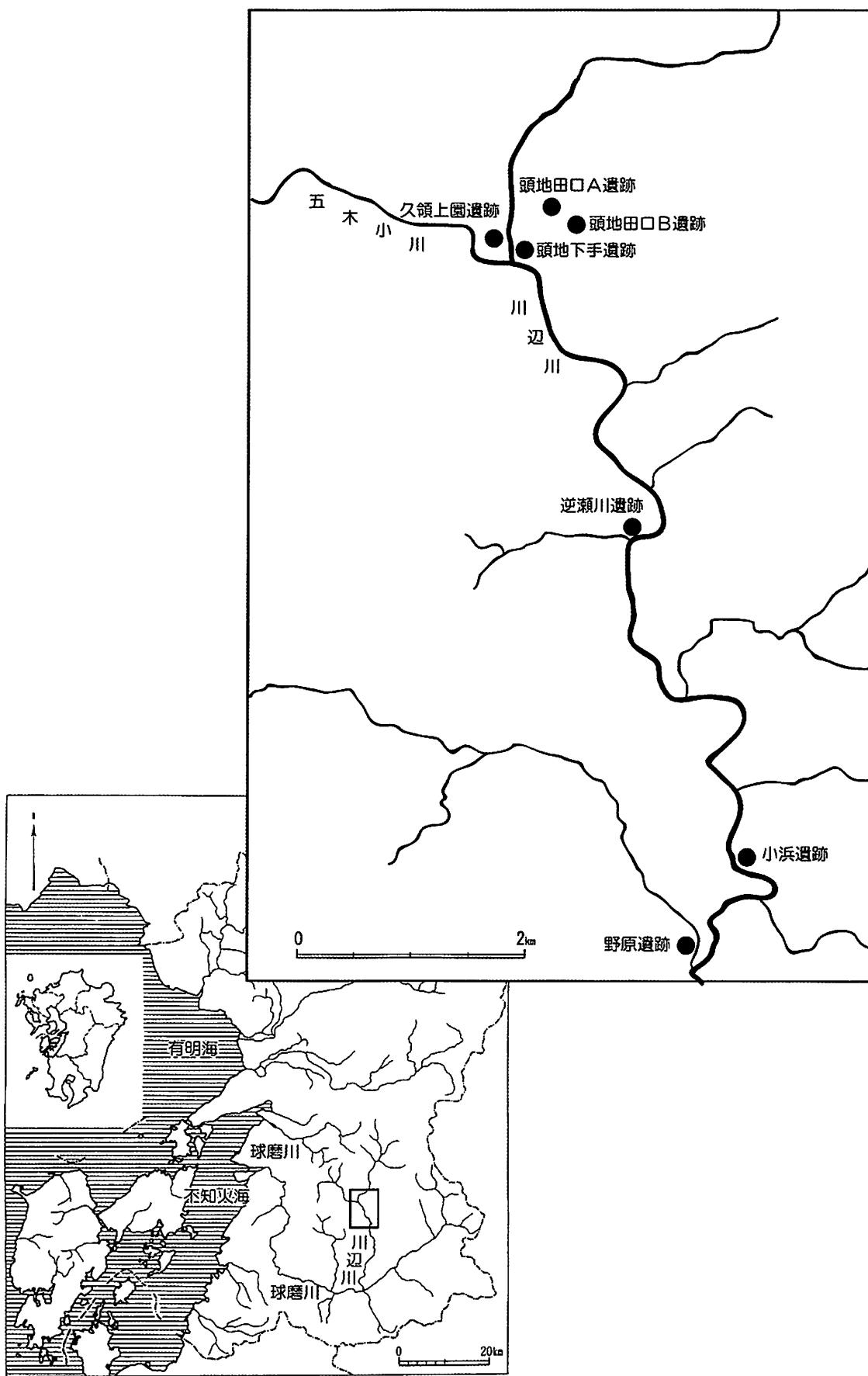
第2図 五木谷の表層地質図

ナイフ形石器が採集されている五木村野々脇遺跡（五木村教育委員会1995）である。

以後、五木谷では、原始、古代、中世、近世、近代、現代、と確実に人類の暮らしがつながってきたが、その中でも縄文式土器時代（以下、「縄文時代」という。）は、五木谷において特に人類が活発に活動していた時代であった。特に、早期と中期・後期は、確実なムラ跡が発見されるなど、山間での縄文人の暮らしの一面を資料的に明らかにできる時期である。

熊本県立装飾古墳館では、平成16年1月18日（日）から3月21日（日）まで、平成15年度企画展示『肥後の至宝展Ⅱ 球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』を開催した。この展覧会の中で、山間での縄文人の暮らしの一面を明らかにできる資料が揃う中期・後期を取り上げ、そこでの人類の暮らしぶりを紹介することができた（熊本県立装飾古墳館2004）。

そこで、筆者は、現状の縄文時代の研究がやや平地部での生活に偏りがちであることに鑑み、この展覧会の企画の中で知り得た考古学的情報とその解釈を、現状の考古学的知見に照らして再考し、説明しよう、と起稿することとした。平地部の研究ほどに情報が多くないとはいえ、比較的近距離で、かつ資料的にも検討に耐えうる内容を持つ遺跡の調査が進んでいる五木谷で



第2図 五木谷の位置と関係遺跡

ある。1つの地域研究の材料としても、また縄文時代の1つの側面を示すものとしても、興味深い地域である。十分な研究材料を提供してくれるものと期待できるだろう。

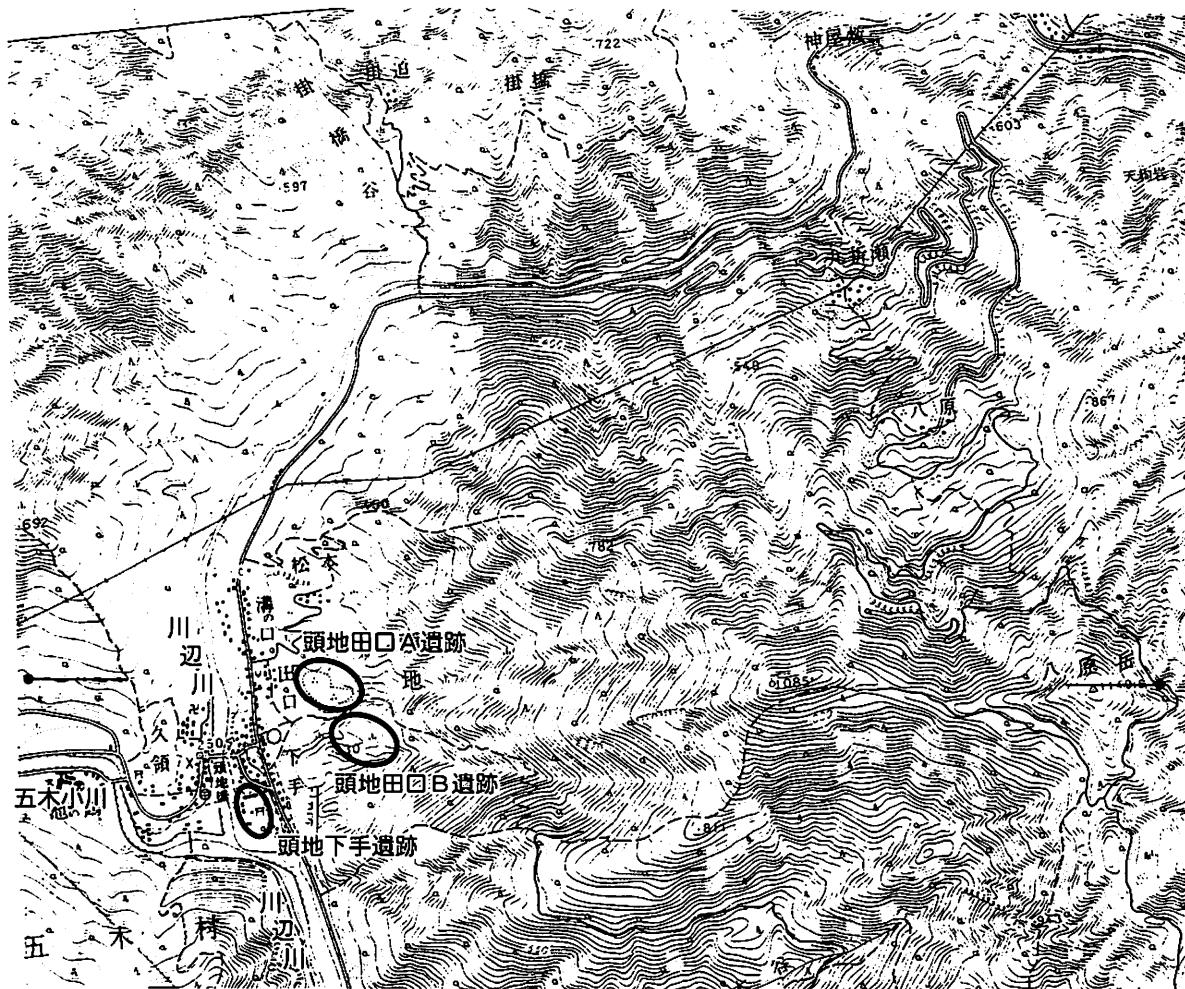
2 五木谷での縄文時代遺跡の調査

五木谷での縄文時代遺跡の調査は、古い。

1940（昭和15）年におこなわれた、小林久雄と高田素次による、五木村の頭地下手遺跡の発掘調査（小林1968）がそれである。この調査では、出水式土器（以下、土器を略して「○○式」という。）や市来式、北久根山式、鐘崎式等の縄文時代後期（以下、縄文時代を略して「○期」という。）の土器と、それに伴う石鏸や磨製石斧、石錘などの石器が数多く見つかった。

1968（昭和43）年、相良村の野原遺跡が見つかった（田辺編1980）。その場所は、V字谷の急な斜面部であった。こういった立地環境の場所で早期や前期、後期の土器、石鏸や石斧、磨石、石皿などが発見されたのである。当然のことながら、その意外性が注目されるところとなつたのである。

建設省（現、国土交通省）が「川辺川ダム建設計画」を1966（昭和41）年に発表すると、五



第4図 頭地一帯の地形図

木谷を中心とする、自然分野や人文分野での学術調査を行う五木村総合学術調査団が組織された。その学術調査の一環で行われたのが、熊本大学考古学研究室による1977（昭和52）年の頭地下手遺跡の発掘調査であった（熊本大学考古学研究室1978）。

この川辺川ダム建設に係る発掘調査は、1990年代以降、活発化した。縄文時代関係の発掘調査では、五木村野々脇遺跡（1993年～1994年）、頭地田口A遺跡（1993年～1997年）、頭地田口B遺跡（1994年～1995年）、頭地C遺跡（1993年）、頭地松本B遺跡（1995年～1997年）、小浜遺跡（1996年）、逆瀬川遺跡（1999年～2000年）、大平遺跡（2001年～2002年）、頭地下手遺跡（2004年～）、久領上園遺跡（2004年）、相良村野原遺跡（1999年～2000年）などをあげることができる。この中で、今回検討を行なう中期、後期関係としては、中期と後期の土器が僅かに見つかっている頭地田口A遺跡（熊本県教育委員会2002）、中期の阿高式が見つかっている頭地田口B遺跡（五木村教育委員会1997）、中期から後期かけての土器と石器類が多量に、さらに竪穴式住居跡が見つかっている逆瀬川遺跡（五木村教育委員会2003）、中期の阿高式などが見つかっている小浜遺跡（五木村教育委員会1998）、中期から後期かけての土器と石器類が多量に見つかっている頭地下手遺跡、中期から後期かけての土器と石器類が見つかっている久領上園遺跡、中期から後期かけての土器と石器類が多量に、さらに竪穴式住居跡が見つかっている野原遺跡（相良村教育委員会2003）がある。

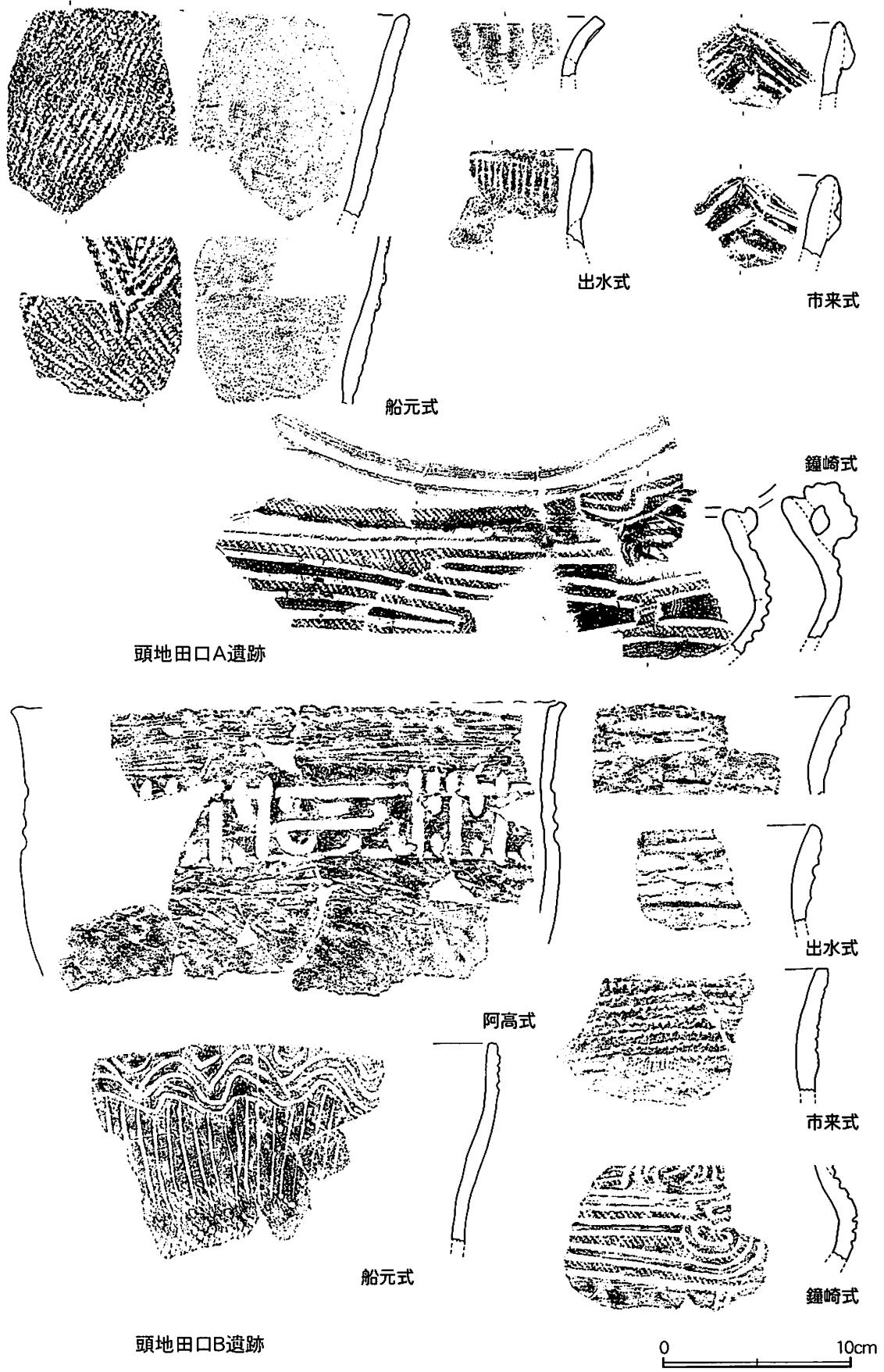
3 対象とする遺跡の概要

五木谷の中期から後期にかけての遺跡については、すでに紹介したとおり、頭地田口A遺跡、頭地田口B遺跡などの7遺跡がある。ここでは、その内容がある程度明らかな、頭地田口A遺跡、頭地田口B遺跡、逆瀬川遺跡、小浜遺跡、頭地下手遺跡、野原遺跡（第3図）を取り上げて検討する。そこで、まずはその遺跡の概要について見ていくことにしたい。

（1）頭地田口A遺跡

五木谷には、川辺川とその支流の五木小川が合流する、川辺川沿いの中でも比較的開けた土地がある。そこは、頭地という五木谷の中心地である。この土地には、合流地点周辺の平坦地と、川辺川左岸山腹中に広がる緩やかな傾斜地がある（第4図）。五木村田口にある頭地田口A遺跡は、標高320～310m、そんな傾斜地の、2つの川の合流点を見下ろせる、川辺川からの比高差約80～70mのところであった。

中期から後期にかけての調査では、僅かながら土器や石器が検出された。中期の土器は、船元式であった。後期の土器は、出水式、市来式、鐘崎式であった（第5図）。いずれの時期の土器も、少量であった。石器については、所属が明らかなものは無い。



第5図 頭地田口A遺跡、頭地田口B遺跡の土器

(2) 頭地田口B遺跡

頭地田口B遺跡は、川辺川に五木小川が合流する、川辺川沿いの中でも比較的開けた土地にある、頭地田口A遺跡に隣接する遺跡である（第4図）。

中期から後期にかけての調査では、僅かながら土器や石器が検出された。中期の土器は、阿高式と船元式であった。数点の出土量であった。後期の土器は、出水式、市来式、磨消縄文であった。出土量は、破片45点で、そのほとんどが市来式であった（第5図）。石器は、49点が出土した。その内訳は、磨製石斧13点、礫器1点、礫石錘18点、磨石・敲石14点、石皿・台石3点であった。出土分布では、集中箇所が見られ、5m×10mの範囲に集まる傾向が認められたという。

(3) 頭地下手遺跡

頭地下手遺跡は、川辺川に五木小川が合流する、川辺川沿いの中でも比較的開けた土地にある遺跡である。先に紹介した頭地田口A遺跡や頭地田口B遺跡の近隣の遺跡にあたるが、山地中腹の斜面地にあるこれらの遺跡とは異なり、川辺川と五木小川の合流点を間近に見ることのできる遺跡である（第4図）。標高240m前後で、川辺川からの比高差6～7mである。

小林久雄と高田素次によっておこなわれた、1940（昭和15）年的小規模な調査ということで、データは古く、調査面積も狭い。そのため、他の調査データと比較することは無理もあるが、貴重なデータでもあり、可能な限り紹介したい。

1940（昭和15）年の調査では、後期の土器とそれに伴う石器が出土した。後期の土器では、出水式や市来式、北久根山式、鐘崎式等がある（第6図）。すべての出土点数、土器型式毎の出土点数については、残念ながら明らかにされていない。石器では、報告に依ると、石鏃1点、磨製石斧8点、打製石斧2点、礫石錘11点、切目石錘1点などが出土していたようである（第6図）。また、磨石・敲石や石皿・台石が出土していないが、こ



第6図 頭地下手遺跡の土器、石器

れが本来のものなのか、この調査の段階ではこうした石器が認識されていなかったのか、判断が分かれるところであろう。

調査面積については、長さ6m、幅1mの2本のトレーナーが遺跡の中に入れられていることから、12mということになる。極めて狭い面積からの出土量ということからすれば、かなり大規模な遺跡を想定せざるを得ない。

(4) 逆瀬川遺跡

逆瀬川遺跡は、五木村逆瀬川の、川辺川の右岸、V字谷の谷底の河岸段丘上にある(第7図)。標高230m、川辺川からの比高差約10mである。砂層や砂礫層が入り込んでいる地層の特徴から、当地が川の水に流されやすい土地であったことを窺わせる。

調査では、竪穴式住居跡5基が検出された。いずれも直径4mの円形の住居跡で、中央に炉を置いた住居跡も認められた(第8図)。この他、直径2.8mの竪穴住居状の遺構も1基検出された。遺跡の中央部やや北側の微高地で検出されている。

遺物としては、中期から後期にかけての土器、石器が出土した。その総点数は、10000点であった。

土器では、後期の出水式を中心に、中期の阿高式、船元式、後期の南福寺式や市来式、磨消繩文が出土した(第9図)。

石器は、1000点を越えている。その内訳は、石鏃269点、削器22点、石匙21点、石錐27点、楔形石器9点、磨製石斧134点、鑿状磨製石斧6点、打製石斧4点、礫器1点、礫石錐473点、切目石錐3点、磨石・敲石91点、石皿・台石65点、十字形石器1点、石製垂飾品1点などであった。

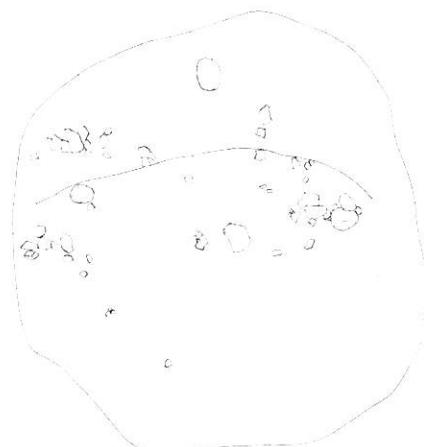
(5) 小浜遺跡

小浜遺跡は、五木村小浜の、川辺川の左岸、V字谷の谷底近くの河岸段丘上にある(第10図)。標高215m、川辺川からの比高差約16mである。

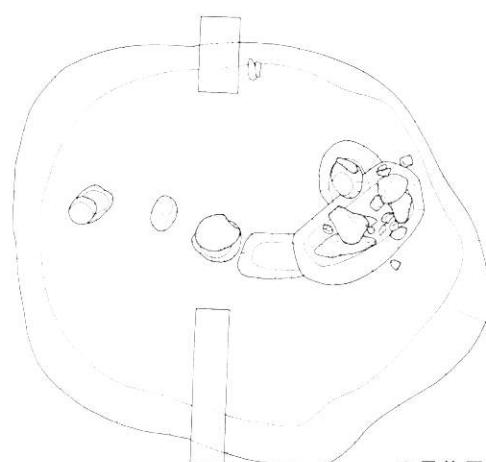
遺物としては、中期から後期にかけての土器、石器が出土した。その総点数は、5924点であった。



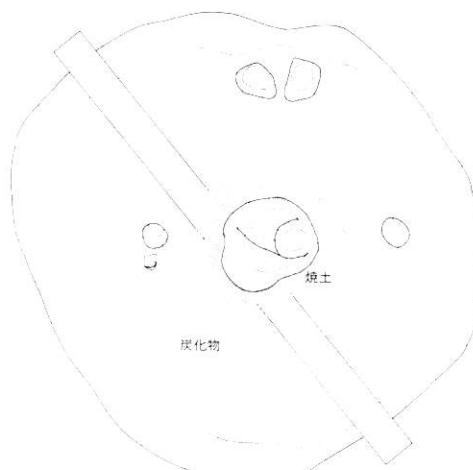
第7図 逆瀬川遺跡周辺地形図



1号住居跡



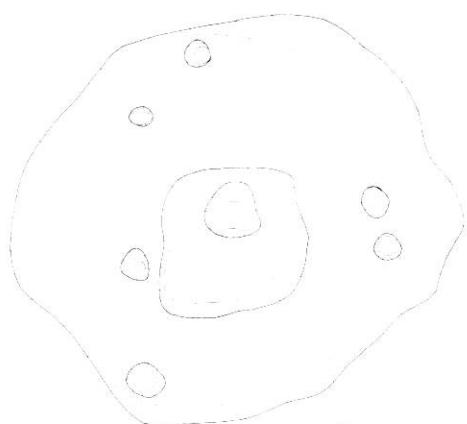
2号住居跡



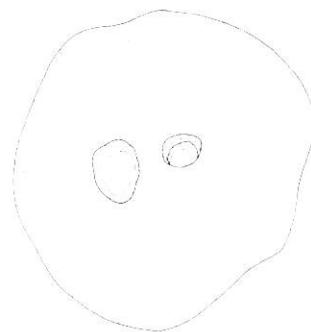
3号住居跡



4号住居跡



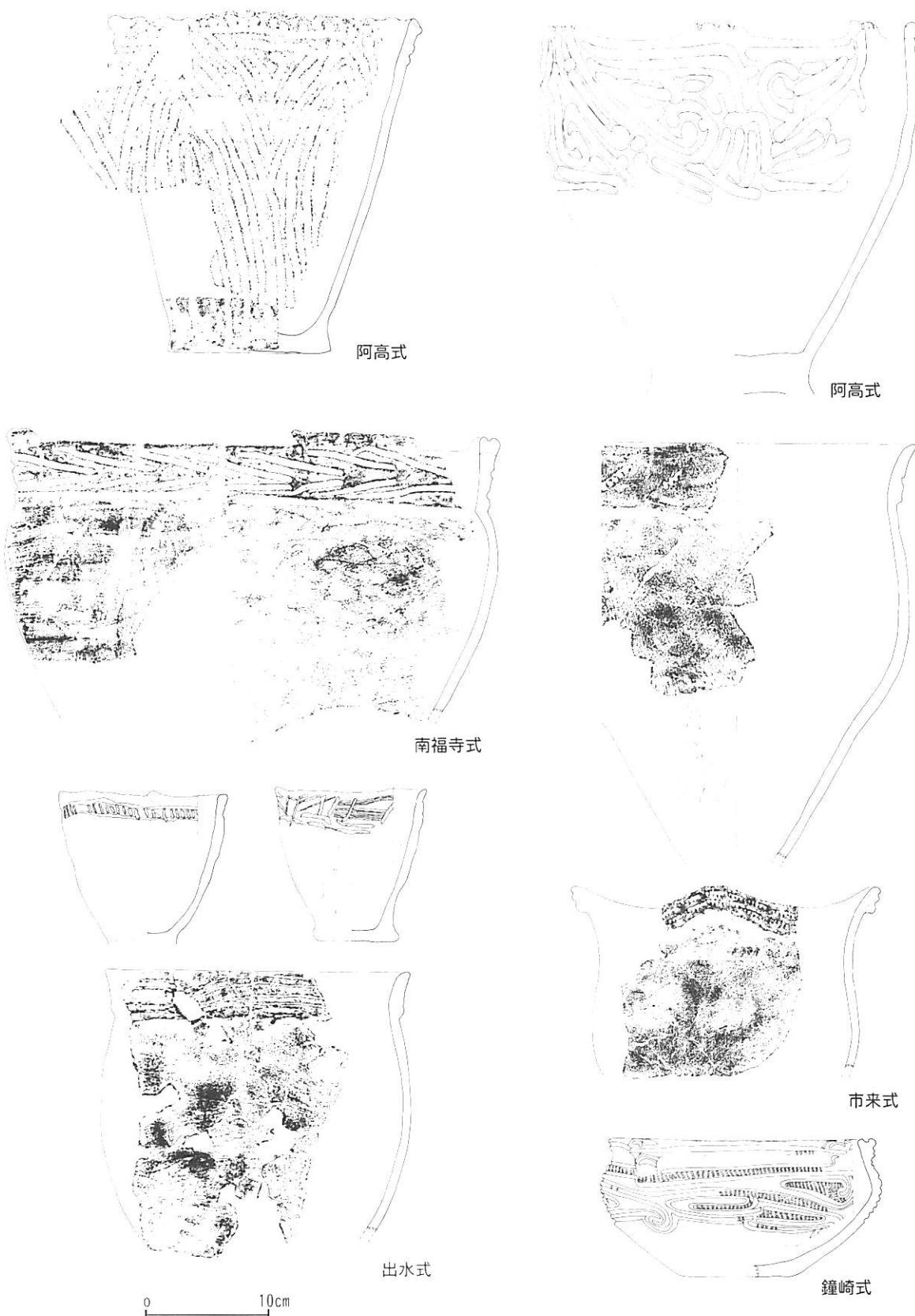
5号住居跡



住居跡状遺構

0 1m

第8図 逆瀬川遺跡の竪穴式住居跡



第9図 逆瀬川遺跡の土器型式

中期の土器では、並木式、船元式、阿高式があった(第11図)。この中、並木式と船元式は文様で確認できたもので数点にすぎず、その多くは阿高式であった。しかも、完形に復元できた土器2個を含め、大型の土器片も出土するなど、安定した出土状況であった。ここでは、土器の型式を検討するものではないので詳述は避けるが、胴部上半部に凹線が付される土器がほとんどであった。後期の土器は、南福寺式が多く出土した(第11図)。また、数的には少ないが、御手洗A式、市来式、出水式などが出土している。

石器は、144点出土した。その内訳は、石鎌21点、削器14点、石匙2点、石錐2点、磨製石斧21点、石錘7点、磨石・敲石14点、石皿・台石3点などであった。



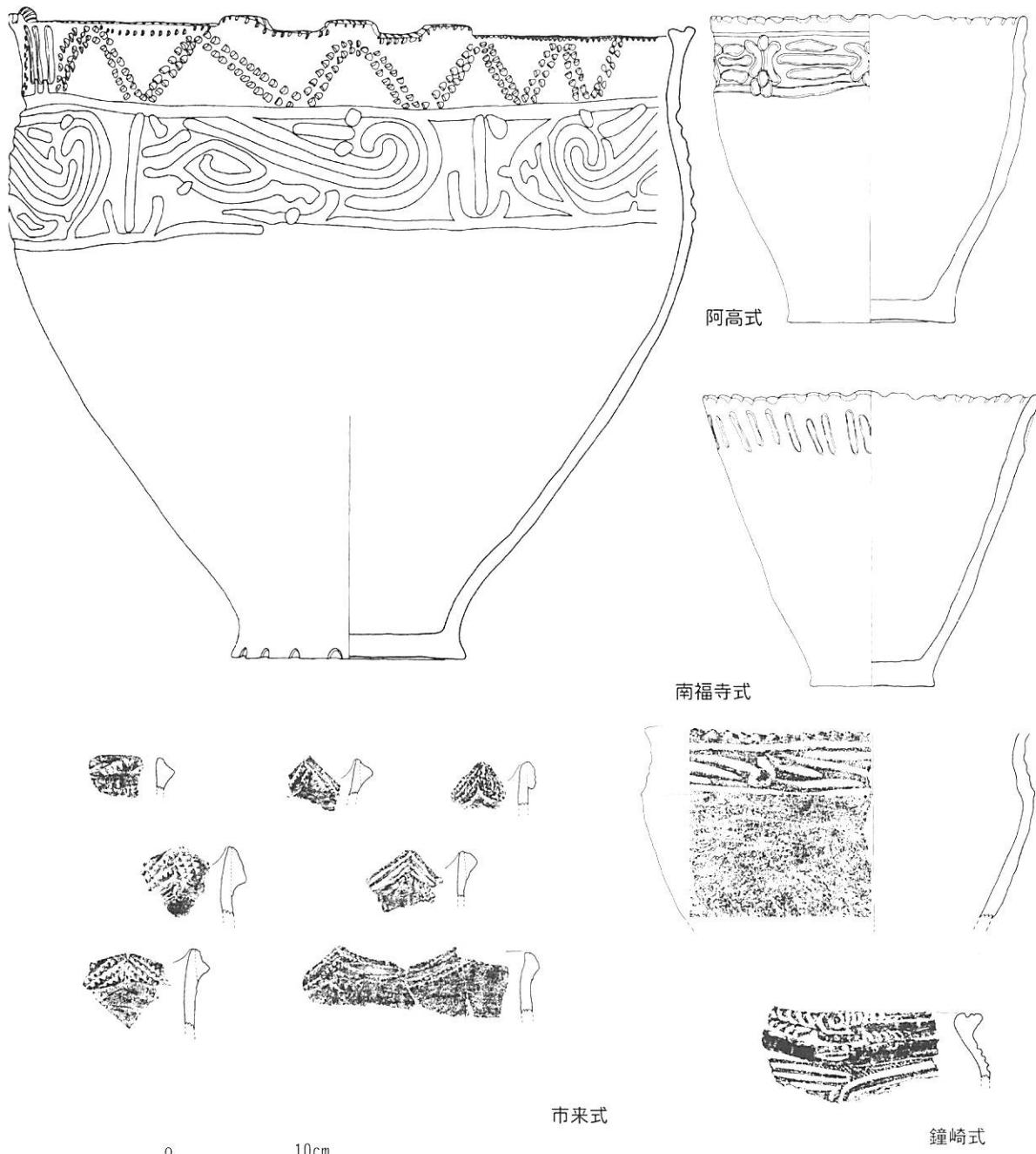
第10図 小浜遺跡周辺地形図

(6) 野原遺跡

野原遺跡は、相良村野原の、川辺川の右岸、V字谷を形成する山腹の一角にあり、その急な斜面の中でも少し傾斜を緩くした土地にあった(第12図)。標高は210~230mで、川辺川と遺跡中心域との比高差は約35~40mである。

調査では、竪穴式住居跡2基、土坑56基、土器捨て場2ヶ所が検出された(第13図)。

竪穴式住居跡は、1基が1辺3m前後の正方形を、もう1基が径4.1~3.5mの円形を呈していた。いずれも中央に炉を置いていた。25mの間隔をおいて遺構分布域の北端付近と南端付近で検出された(第13図)。



第11図 小浜遺跡の土器型式

土坑は、大小に違いがあるものの、基本的に円形を呈していた。竪穴式住居跡との切り合い関係は無いが、隣接しながら遺構分布域の全域に広がっていた。56基の土坑には、墓や貯蔵穴などを含んでいることが想定できるが、明確な機能を窺わせる証拠が少ない。

そうした中で126個の炭化種子が出土した6号土坑(第13図)は、注目され、重要である。出土した炭化種子が「渋抜きをすれば優良な食用となる」アカガシ(古環境研究所2003)で、これをもって6号土坑を貯蔵穴とすることも可能だからである。ただし、その出土位置が覆土の

中位にあり、原位置を留めているものではなく、これをもって貯蔵穴とすることはできないが、土層の堆積を検討すれば、興味深いことをわかる。それは、土層区分ができないものだったが、遺物が自然堆積を示すような出土状況を示しているからである。要するに、この6号土坑を墓壙とすることことができず、貯蔵穴の可能性が高いと認識することができるだろう。

このように、土層区分ができないものを墓壙に、自然堆積を示す土層のものを貯蔵穴に振り分けることができる。また、土層区分ができないものでも、出土遺物が自然堆積を示すようなものを貯蔵穴に想定することができる。

報告では、「土器だまり」と「遺物集積部」とされていたものを、ここでは、土器捨て場として一括して取り扱いたい。1ヶ所は、遺構分布域の南端部近く、円形の竪穴式住居跡（2号）に隣接した、斜面部側に1ヶ所認められた。径3.8m～3.3mの範囲であった。もう1ヶ所は、遺構分布域から離れて、そこより5～10m下の急斜面にあった。前者は直接的な投棄場として認識でき、後者は投棄場から転落したものと認識できる。したがって、これら2ヶ所の位置関係から、1連のものである

可能性も十分にある。

遺物としては、中期から後期にかけての土器、石器が出土した。その総点数は、20000点を越えていた。

中期の土器には、阿高式があった（第14図）。後期の土器には、南福寺式、出水式、市来式、北久根山式、磨消縄文などがあった（第14図）。これらの土器型式にはそれぞれに分布の傾向があるはずであるが、報告の中で図が示されていないので、その傾向を窺い知ることができないのが残念である。

石器類は、1031点が出土した。その中の石器の内訳は、石鏸40点、削器3点、

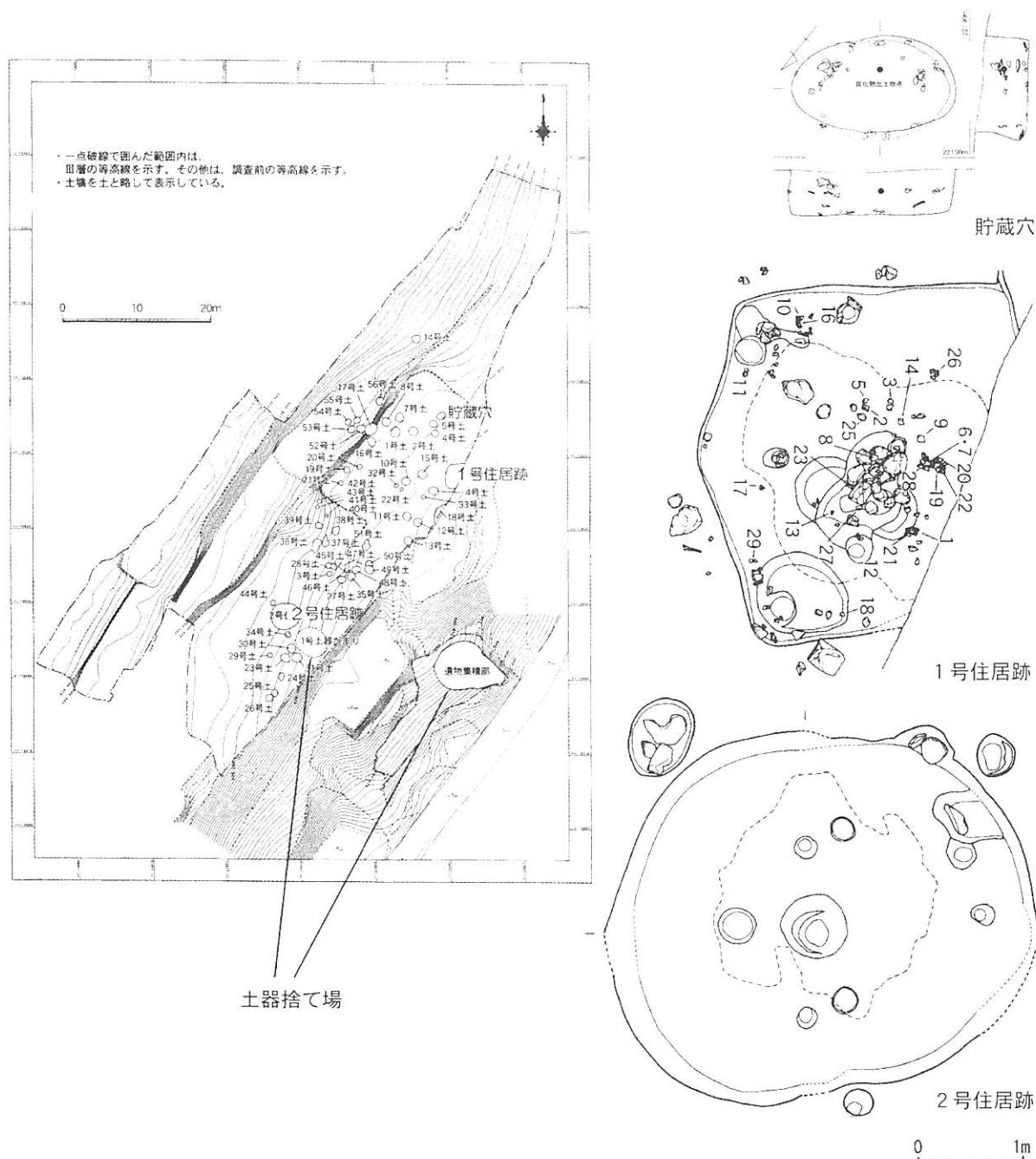


第12図 野原遺跡周辺地形図

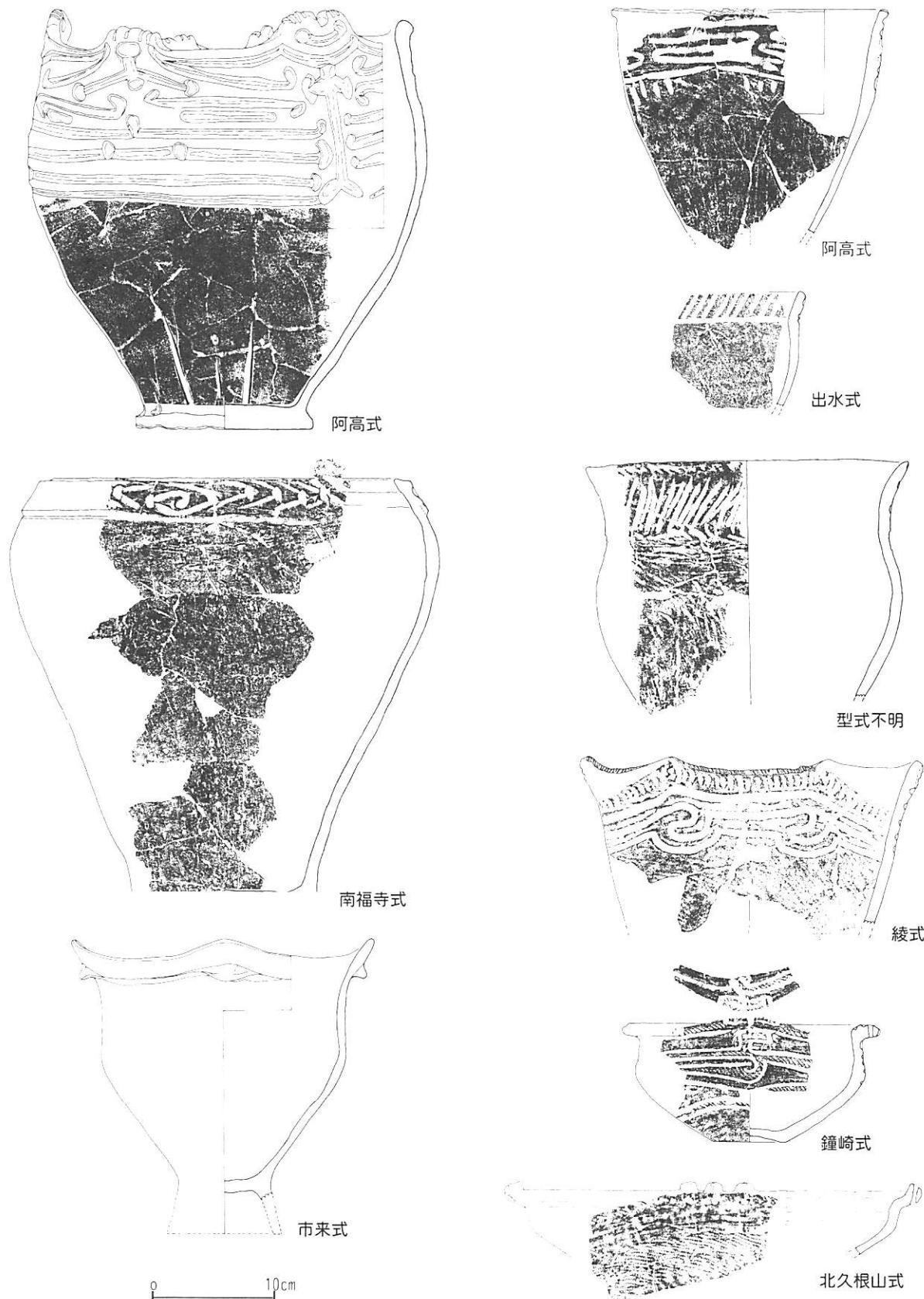
石匙3点、石錐3点、磨製石斧(環状石斧1点を含む)42点、鑿状磨製石斧1点、礫石錐121点、磨石・敲石792点、石皿・台石16点、円盤状石器8点、石劍状石製品1点などであった。

4 五木谷における中期～後期の石器相

これまで五木谷の中期から後期にかけての遺跡を概観してきたが、それによると、おおむね中期後半から後期前半にかけての、比較的限られた時期の遺跡であることがわかる。これらの



第13図 野原遺跡の遺構



第14図 野原遺跡の土器型式

遺跡が極めて近接した時期にあるのであって、遺跡比較という点で重要であることは明白である。本稿もこの点を重視しているのであるが、そこで、次には、それぞれの遺跡の石器組成の内容を検討することとしたい。ただし、その前提として、遺跡の規模と立地をみることを先に行つた方が賢明であろうから、遺跡の規模と立地、それから見た遺跡の類型化、石器相の検討という手順で進めていくことにしよう。

(1) 遺跡の規模と立地

五木谷には、川辺川とその支流の五木小川が合流する、川辺川沿いの中でも比較的開けた土地がある。そこには、立地環境的に、合流地点周辺の平坦地と、川辺川左岸山腹中に広がる緩やかな傾斜地があり、それぞれに当該期の遺跡がある。合流地点周辺の平坦地の頭地下手遺跡、川辺川左岸山腹中に広がる緩やかな傾斜地頭地田口A遺跡と頭地田口B遺跡、という3つの遺跡である。

それらの規模と立地を見てみれば、大きく2種類の遺跡に峻別できる。

1つ目の遺跡は、山腹中の緩やかな傾斜地に立地する。頭地田口A遺跡と頭地田口B遺跡が該当する。川辺川からの比高差が80m程の高所にある遺跡である。土地の傾斜は、10%の勾配であった。ここで検出された遺跡の規模は、僅かな土器や石器が検出された頭地田口A遺跡や、阿高式と船元式が合わせて数点、出水式、市来式、磨消繩文が合わせて45点、磨製石斧(13点)、礫器(1点)、礫石錐(18点)、磨石・敲石(14点)、石皿・台石(3点)が合わせて49点出土した頭地田口B遺跡、というように小規模である。また、頭地田口A遺跡では遺物が散在する状態での出土で、明確な集落を形成しているようにみえず、頭地田口B遺跡では集中箇所が見られるとはいっても、5m×10mの範囲という限られたもので、これもまた明確な集落を形成しているようにみえない。しかも、他種類の石器が検出された頭地田口B遺跡であるが、磨製石斧、礫器、礫石錐、磨石・敲石、石皿・台石のみが存在するだけで、五木谷での中期や後期の遺跡で普通に検出される、石鏸や削器、石匙、石錐などの剥片石器や、それらを製作するための石核、剥片、碎片が検出されていないのである。これは、特筆すべきことで、山腹中の緩やかな傾斜地で行われた縄文人たちの行動パターンを窺わせてくれるものであろう。

2つ目の遺跡は、合流地点周辺の平坦地に立地する。頭地下手遺跡が該当する。川辺川からの比高差が6～7mと、川辺川と五木小川の合流点が間近にある遺跡である。そういう意味では、谷底に立地する遺跡ということになるだろう。調査そのものが古いことから、詳細な検討ができないのが残念であるが、12m²という狭い面積での調査であるにもかかわらず、出水式や市来式、北久根山式、鐘崎式等の後期の土器が多数出土しているし、石器でも石鏸(1点)、磨製石斧(8点)、打製石斧(2点)、礫石錐(11点)、切目石錐(1点)などが出土している。この出土量や出土状態からすれば、かなり大規模な遺跡である可能性が高い。この中で、礫石錐

や切目石錐の出土量については、川に近い遺跡であるということからも見逃せないものである。

なお、2004年度の調査でその詳細が確認された久領上園遺跡もこの遺跡に該当する。ただし、詳細は未報告のため、ここでは検討の対象から外すことにした。

川辺川とその支流の五木小川が合流する土地を過ぎて下流に行けば、すぐに急峻なV字谷が現れる。そのV字谷は、細長く蛇行しながら、およそ16km続いている。この急峻で細長く続く土地に、中期～後期の遺跡が点在している。その遺跡をあげれば、逆瀬川遺跡、小浜遺跡、野原遺跡がある。それらの規模と立地をみてみれば、大きく2つの遺跡に峻別できる。

1つ目の遺跡は、急峻なV字谷の山腹中の傾斜地に立地する。野原遺跡が該当する。川辺川からの比高差が40m程の高所にある遺跡である。その土地の傾斜は、10%の勾配であった。ここで検出された遺跡の規模は、竪穴式住居跡2基、土坑56基、土器捨て場2ヶ所の他、中期～後期にかけての土器、石器20000点が出土するほどの安定したものであった。幅が15mで、長さが50mという狭い面積の緩斜面地であったが、その内容は特筆に値しよう。特に、礫石錐が121点、磨石・敲石が792点、石皿・台石が16点あること、中でも磨石・敲石が792点もあることは、山腹中の緩やかな傾斜地で行われた縄文人たちの行動パターンの1面を窺わせてくれるものとして注意しておきたい。

2つ目の遺跡は、川辺川沿いのV字谷の谷底近くの河岸段丘上に立地する。逆瀬川遺跡や小浜遺跡が該当する。いずれも、川辺川からの比高差が16m～10mと、川辺川が間近にある遺跡である。この種の遺跡では、5基の竪穴式住居跡が検出され、また10000点に上る多数の出土物があった逆瀬川遺跡や、5924点の土器、石器が出土した小浜遺跡というように、安定した集落の存在を窺わせてくれる。それは、完形に復元できた土器2個を含め、大型の破片の阿高式が出土するという状況であり、また後期の南福寺式も多いという状況であった。石器では、石鏃（21点）、石錐（7点）、磨石・敲石（14点）とそれほど特徴的な偏りを見出すことができない。これに対して、逆瀬川遺跡では、石鏃（269点）、礫石錐（473点）、有溝石錐（3点）に偏る特徴が見られる。

(2) 規模と立地から見た遺跡の類型

これまで、五木谷の中期から後期にかけての遺跡について、便宜上、地形的に、合流地点周辺の遺跡と川辺川沿いのV字谷の遺跡に分け、さらにそれぞれの遺跡を山腹中の遺跡と谷底近くの遺跡に分けて、それぞれの遺跡の規模なり、石器組成の内容なりを紹介してきた。ここでは、こうした結果を踏まえ、五木谷の中期から後期にかけての遺跡の類型化を行なうこととする。

五木谷の遺跡は、大きく4つの遺跡に整理できる。それは、川辺川と五木小川との合流地点周辺の山腹中に立地する遺跡（以下、「合流地山腹遺跡」という。）、川辺川と五木小川との合流

地点周辺の谷底近くに立地する遺跡（以下、「合流地谷底遺跡」という。）、川辺川沿いのV字谷の山腹中に立地する遺跡（以下、「V字谷山腹遺跡」という。）、川辺川沿いのV字谷の谷底近くに立地する遺跡（以下、「V字谷谷底遺跡」という。）である。

合流地山腹遺跡は、頭地田口A遺跡と頭地田口B遺跡である。遺跡の規模は、僅かな土器や石器が検出されたに過ぎない頭地田口A遺跡や、5m×10mというごく限られた範囲に100点弱の土器、石器が出土した頭地田口B遺跡のように小型である。

合流地谷底遺跡は、頭地下手遺跡と久領上園遺跡である。頭地下手遺跡では、12m²という狭い面積の調査地区から大量の土器や石器が出土している。当地は、五木谷の中でももっとも広い河岸段丘に当たり、しかもその段丘の先端部、川辺川と五木小川の合流点を間近に見下すことのできるところである。五木谷での中心的な集落を擁するに足る立地環境である。

V字谷山腹遺跡は、野原遺跡である。急峻なV字谷の山腹中の、10%勾配の少し緩やかになつた、幅15m、長さ50mという狭い土地であるが、竪穴式住居跡2基、土坑56基、土器捨て場2ヶ所が検出されているように、安定した集落を形成している。

V字谷谷底遺跡は、逆瀬川遺跡と小浜遺跡である。V字谷沿いの狭い河岸段丘上であるが、5基の竪穴式住居跡と多数の出土物があった逆瀬川遺跡や、完形に復元できた阿高式2個を含む5924点の土器、石器が出土した小浜遺跡のように、安定した集落を形成している。

以上、4つの遺跡は、立地環境的にも、内容的にも、それぞれに特徴のある遺跡である。そうはいっても、こうした遺跡には共通項も存在する。そこで、共通項でそれらの遺跡を再整理してみると、次の2つの類型にまとめ上げることができる。

1つ目の類型は、合流地谷底遺跡、V字谷山腹遺跡、V字谷谷底遺跡である。立地環境に大きな開きがあるが、安定した集落を形成しているところでは共通している。ここでは、I類と呼んでおこう。この類型は、その立地環境を基に、さらに2つに細分が可能である。それをIa類とIb類と呼んでおく。Ia類は合流地谷底遺跡で、Ib類はV字谷山腹遺跡とV字谷谷底遺跡である。

Ia類（合流地谷底遺跡）は、五木谷の中でもっとも広い河岸段丘の先端部にあり、川辺川と五木小川の合流点を間近に見下すことのできる、恵まれた立地環境にある遺跡である。12m²という狭い面積の調査で、大量の土器や石器が出土している頭地下手遺跡が該当するが、残念ながら古い調査のために、詳細が明らかでない。現在、熊本県教育委員会が調査を行なっているところである^{註1)}ので、今後、その内容が明らかになっていくものと期待される。

なお、久領上園遺跡も頭地下手遺跡の対岸にある遺跡である。頭地下手遺跡よりは狭い河岸段丘上にある遺跡で、その内容は興味深いものがある。これについては、五木村教育委員会が調査を行なっている^{註2)}ので、今後の報告に期待したい。

Ib類（V字谷山腹遺跡、V字谷谷底遺跡）は、急峻なV字谷にある遺跡である。この類型

には、山腹中の狭い緩斜面とV字谷沿いの狭い河岸段丘、という異なる地形環境の遺跡が含まれている。ただし、狭い土地という点では共通しており、その内容も共通するものが多いことから、これらを地形環境だけで峻別する必要もない。竪穴式住居跡や土坑、多量の土器、豊富な石器類など、通常の集落であることはわかる。

2つ目の類型は、合流地山腹遺跡である。I a類の遺跡を見下ろすことのできる、10%勾配の、山腹中の緩斜面という地形環境にある。ここでは、II類と呼んでおこう。この遺跡については、集落というよりも別の役割が想定される。それは、僅かな土器や石器が検出されたに過ぎなかったり（頭地田口A遺跡）、土器、石器が100点程度で、明確な遺構を伴わず、また磨製石斧、礫器、礫石錐、磨石・敲石、石皿・台石のみが存在するだけで、その他の剥片石器、石核、剥片、碎片が目立たなかったり（頭地田口B遺跡）、という遺跡内容から判断されるのである。そういう意味で、この類型は、谷間の縄文人を考える上で極めて重要な類型の遺跡である、といえるだろう。

(3) 遺跡類型と石器相から見た遺跡類型の性格

五木谷での当該期の遺跡を整理すれば、3つの類型に峻別できる。そこで、谷間の縄文人の活動を考えるために、彼らの活動を示すと考えられる石器相の特徴を遺跡類型ごとにもう一度整理して、遺跡類型の性格をみてみよう。

① I a類

頭地下手遺跡がこの類型の遺跡であるが、出土した石器は、石鏃1点、磨製石斧8点、打製石斧2点、礫石錐11点、切目石錐1点などであった。磨製石斧や石錐の出土量が多いことは興味深いものである。

なお、これを見る限り、磨石・敲石や石皿・台石が出土していない。これについては、前記しているように、本来のものなのか、小林久雄の調査当時、その種の石器が認識されていなかったのか、判断が分かれるところであろう。これについては、現在進められている調査の成果に期待されるところであろう。

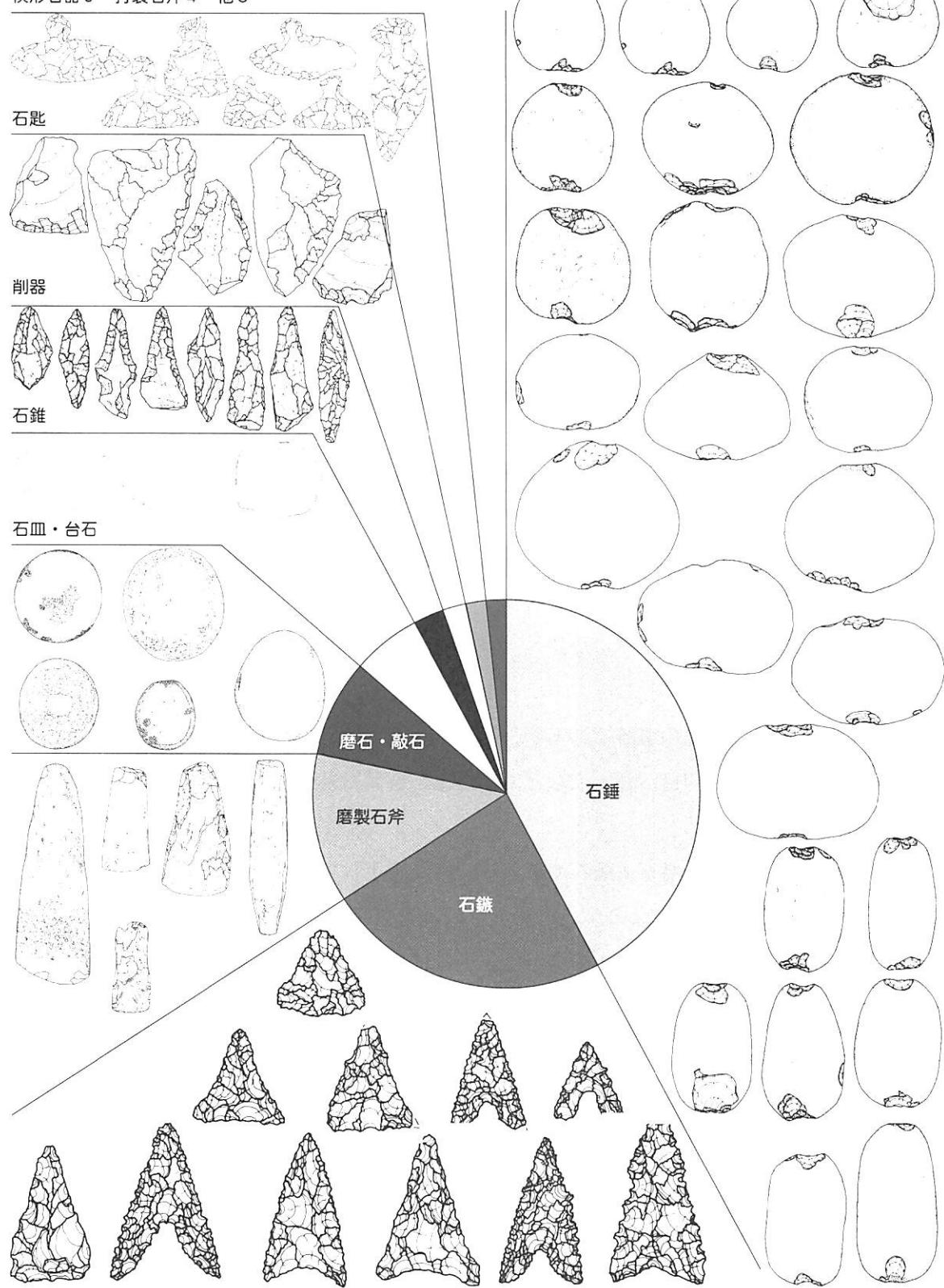
この遺跡類型の性格を知るための判断材料が限られている。このため、具体的な想定については控えることが肝要であろう。ただし、立地環境や遺物出土量から判断できることは、この類型の遺跡が五木谷における中心的な遺跡であることである。

② I b類

小浜遺跡、逆瀬川遺跡、野原遺跡がこの類型の遺跡である。

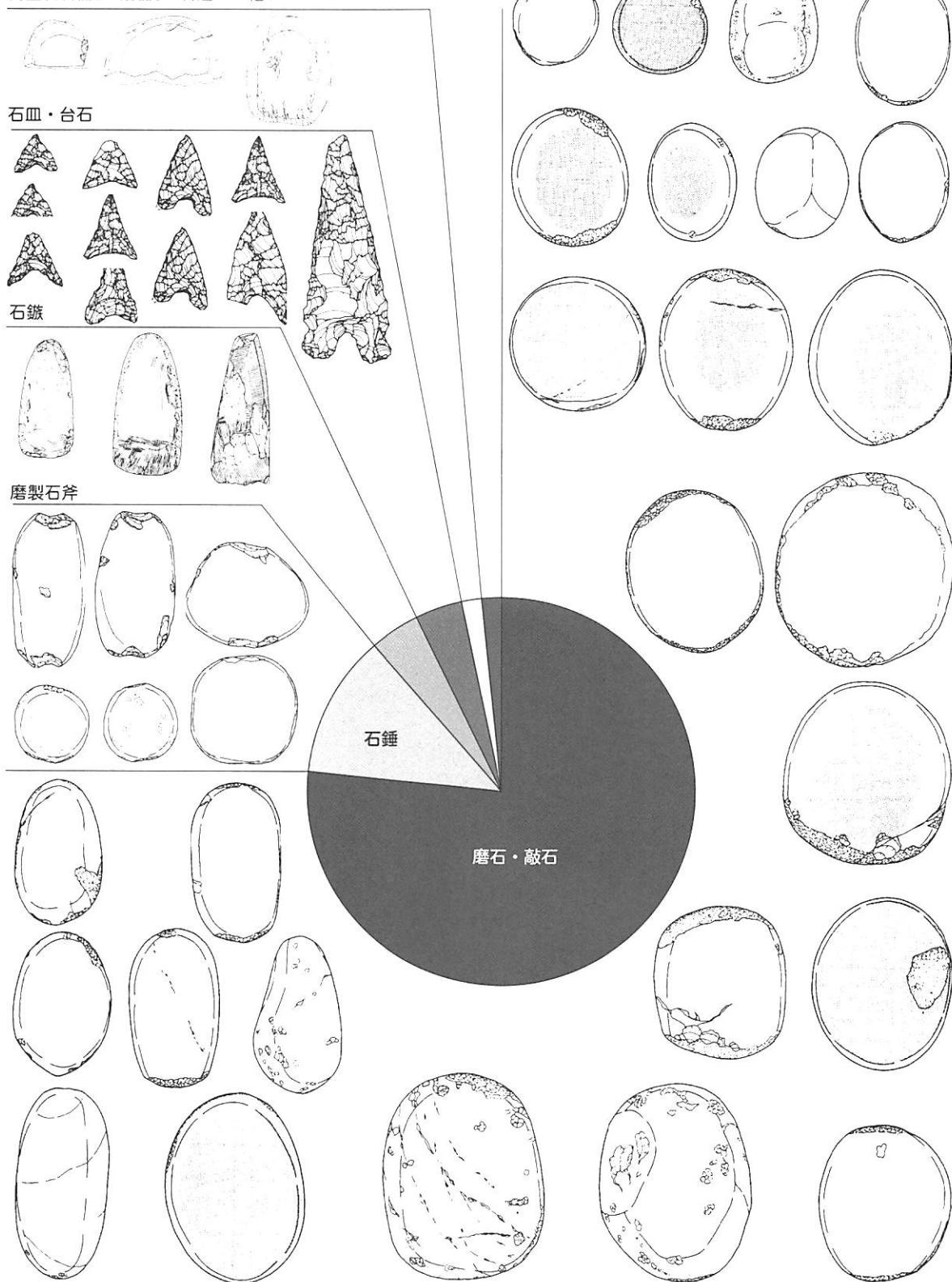
小浜遺跡で出土した石器は、84点を数える。表にその内訳を示しているが、石鏃(25%)、磨製石斧(25%)、磨石・敲石(17%)の出土点数が多い。これに対して、石錐は、8%と少ない。逆瀬川遺跡で出土した石器は、1126点を越えている。表にその内訳を示しているが、石錐

楔形石器9・打製石斧4・他3

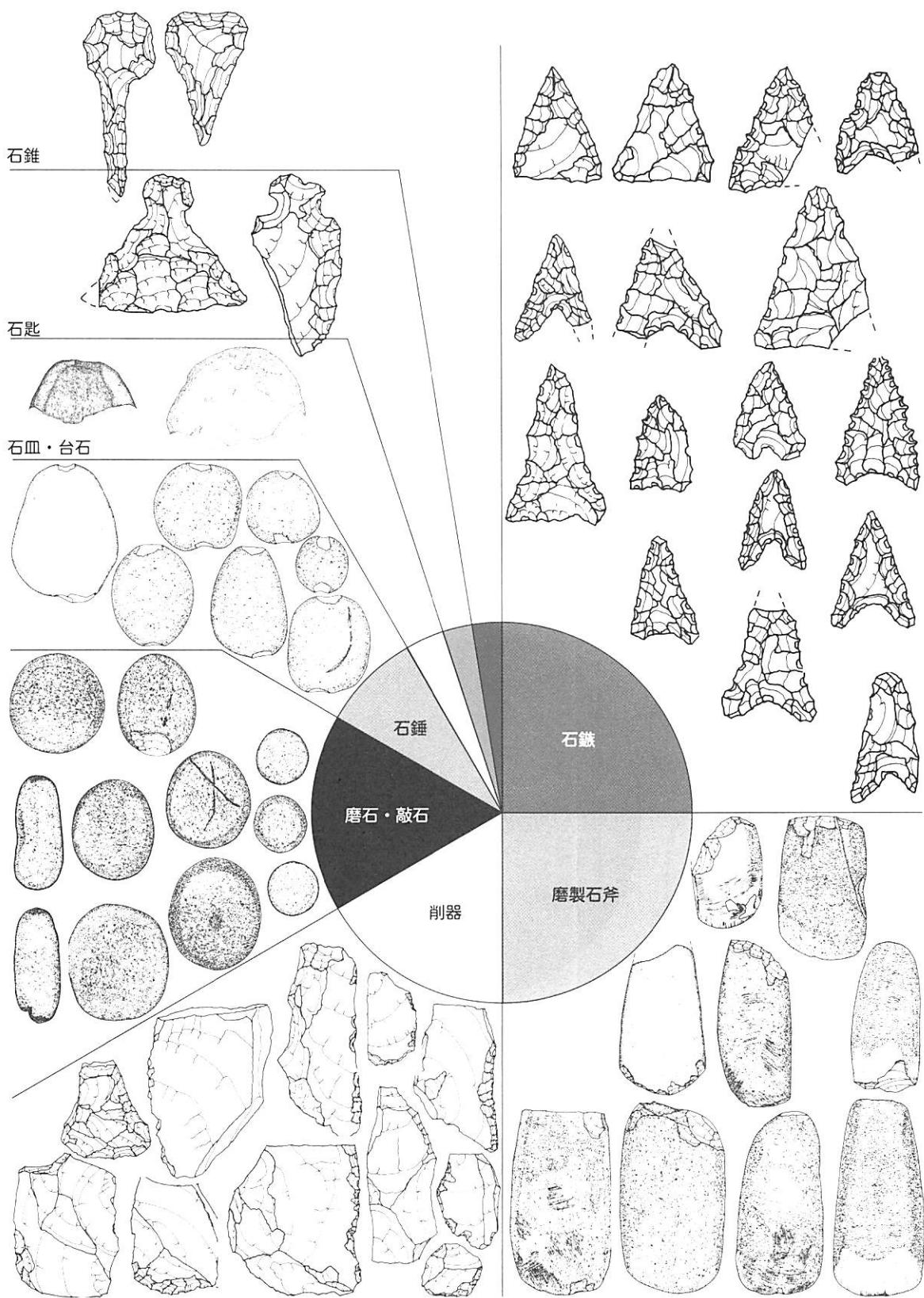


第15図 逆瀬川遺跡の石器組成

円盤状石器8・削器3・石匙3・他4



第16図 野原遺跡の石器組成



第17図 小浜遺跡の石器組成

表 関係遺跡石器組成表

遺跡名	計	石鏸	削器	石匙	石錐	楔形 石器	磨製 石斧	打製 石斧	礫器	石錐	磨石 敲石	石皿 台石	十字型 石	円盤形 器石	器
頭地田口 B	49						13		1	18	14	3			
	%						27		2	37	29	6			
坂瀬川	1126	269	22	21	27	9	140	4	1	476	91	65	1		
	%	24	2	2	2	1	12	—	—	42	8	6	—		
小浜	84	21	14	2	2		21			7	14	3			
	%	25	17	2	2		25			8	17	4			
野原	1021	40	3	3	3		43			121	792	16	1		
	%	4	—	—	—		4			12	78	2	—		

(42%) の多さが際立っている。また、石鏸 (24%) や磨製石斧 (12%) の出土点数も多い。これに対して、磨石・敲石は、8%と極端に少ない。野原遺跡で出土した石器は、1021点である。表にその内訳を示しているが、磨石・敲石が78%と際立っている。石錐は、12%と少ない。

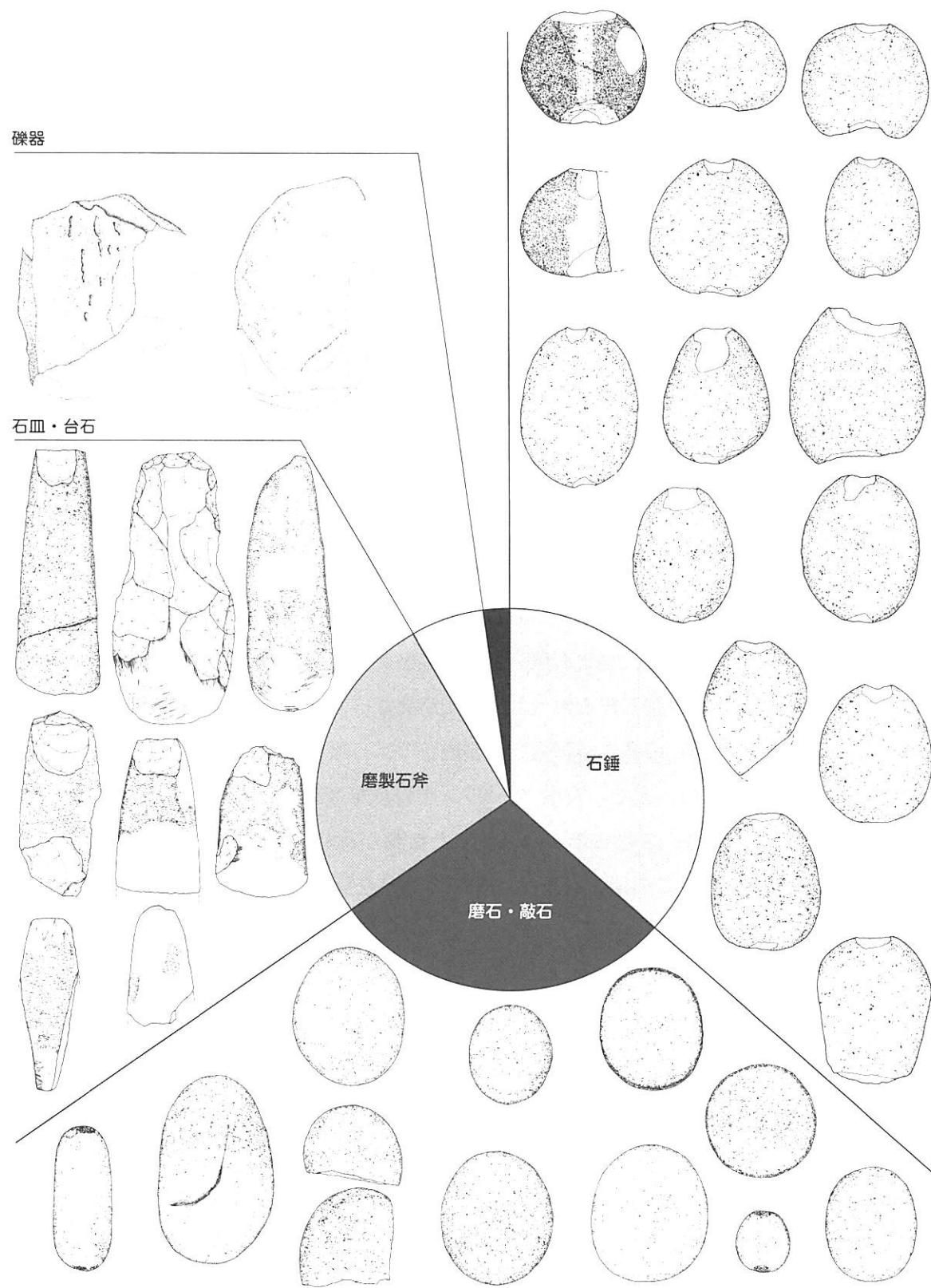
この遺跡類型は、立地環境や遺物出土量から、通常の集落であると考えられる。数基前後の竪穴式住居跡が検出されていることから、おそらくは基本的で単位的な集団が生活した遺跡であることは間違いない。しかも、その生活を暗示する石器組成の特徴が対照的に認められることは、この遺跡類型での活動に多様性があったことを示している、といえるだろう。例えば、石錐 (42%) の多さが際立ち、また石鏸 (24%) や磨製石斧 (12%) の出土点数が多い逆瀬川遺跡では、石錐や石鏸、磨製石斧を使った活動が活発だった可能性が高い(第15図)。これに対して、磨石・敲石 (78%) の多さが際立つ野原遺跡では、磨石・敲石を使った活動が活発だった可能性が高い(第16図)。また、石鏸 (25%)、磨製石斧 (25%)、磨石・敲石 (17%) の出土点数が多い小浜遺跡では、これらの石器を使った活動が行われていた可能性が高いのである(第17図)。このように、この遺跡類型には多様な活動を反映した遺跡が含まれているわけであって、それぞれの遺跡にはどのような関連性があるのか、が注目されることであろう。

③ II類

頭地田口A遺跡、頭地田口B遺跡がこの類型の遺跡である。

頭地田口A遺跡では、明確な石器が出土していない。

頭地田口B遺跡では、49点の石器が出土した。表にその内訳を示しているが、すべて、製品のみで占められていた(第18図)。このことは、石器製作がその土地で行なわれておらず、製品のみが持ち込まれていたことを示すものである。また、剥片石器や、その製作に伴う石核、剥片、碎片の存在が認められない。このことは、剥片剥離から剥片石器の製作までが行なわれていなかつたことを示すものである。さらに、磨製石斧 (27%)、石錐 (37%)、磨石・敲石 (29%) がほぼ同率で存在していることも重要である。個別的な作業が同じ程度で行われていたことを想定せざるを得ない。



第18図 頭地田口 B 遺跡の石器組成

この遺跡類型は、I類の集落とは明らかに違う遺跡である。その内容を考える限り、一般的な集落とは考えられず、派生的な活動地である可能性が高いのである。

5 五木谷における中期～後期の遺跡連鎖

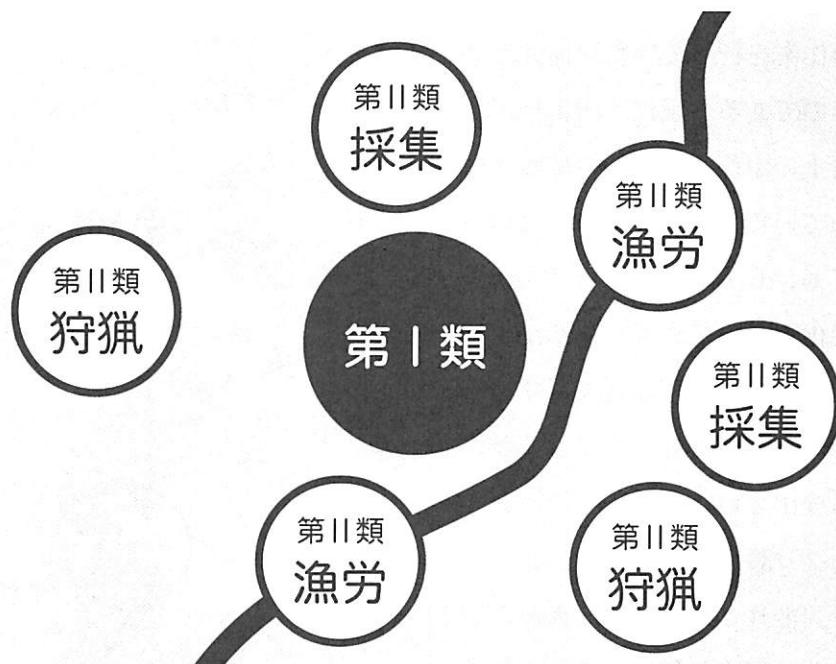
五木谷における中期から後期においては、Ia類、 Ib類、 II類という遺跡類型が存在していた。Ia類は、五木谷における中心的な遺跡であった。 Ib類は、一般的な集落であると共に、多様な活動を反映した集落が含まれていた。これに対して、II類は、集落外の派生的な活動地であった。

それでは、これらの遺跡類型は、個々独立して存在したのであろうか。

遺跡類型を通観すれば、集落としてのI類、集落外の活動地としてのII類に大きく峻別できるが、これらの関係を、集落（I類）とそこから出張った活動地（II類）という関係で捉え直すことができるだろう。II類が独立した集落として認められないことから、そのように判断するのであるが、縄文人の活動地を集落外に派生させていた仕組みは充分に想定できるところである。したがって、それぞれの関係を図式化すれば、I類（集落）を基点において、その周辺にII類が配されていた、

という関係（第19図）
を想定することができ
る。

次に、多様な活動を
反映した集落が含まれ
ていたI類についても、
Ia類とIb類が存在
していたし、Ib類に
も石器相の特徴におい
て異なる性格を想定で
きる遺跡が存在してい
た。ただし、これらの
類型なり、遺跡なりが



第19図 第I類、第II類の位置概念図

個々独立して存在していた、ということは想定しにくいところがある。例えば、Ib類には、石器相において、

- ・石錐（42%）の多さが際立ち、また石鏃（24%）や磨製石斧（12%）の出土点数が多く、石錐や石鏃、磨製石斧を使った活動が活発だった可能性が高い逆瀬川遺跡
- ・磨石・敲石（78%）の多さが際立ち、磨石・敲石を使った活動が活発だった可能性が高い野

原遺跡

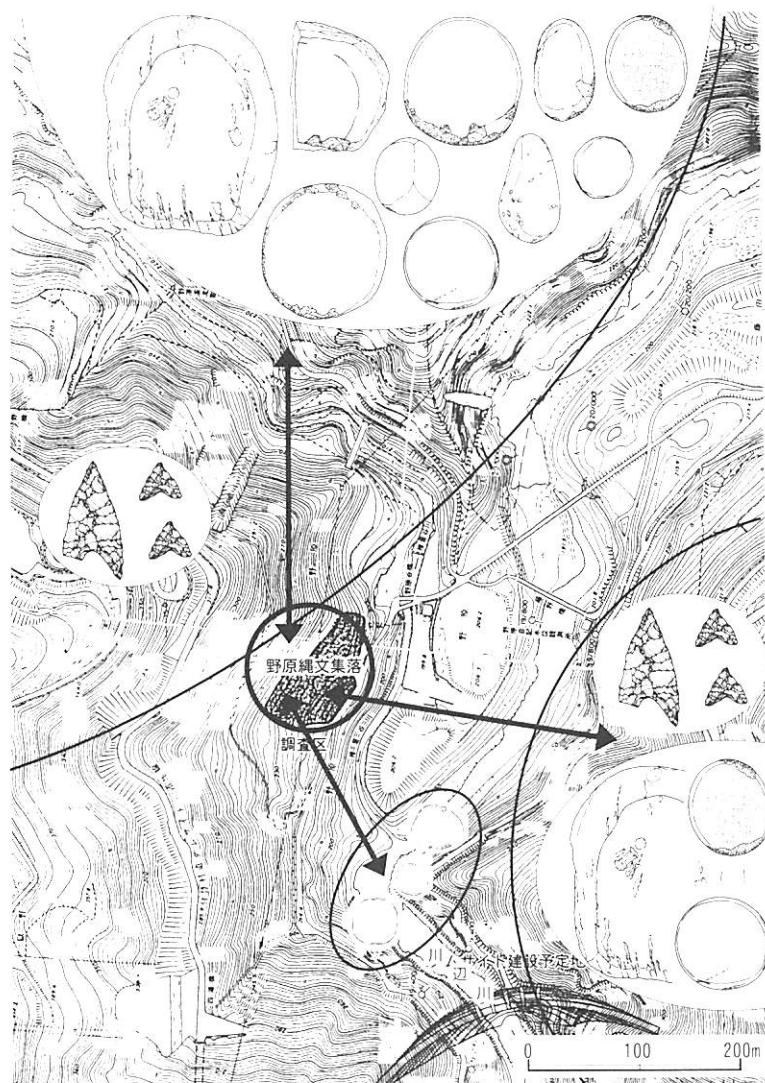
- ・石鏃 (25%)、磨製石斧 (25%)、磨石・敲石 (17%) の出土点数が多く、これらの石器を使った活動が活発だった可能性が高い小浜遺跡

というように、特徴が異なる遺跡が含まれていた。明らかに、遺跡ごとに、主となる活動内容が異なっていたのである。しかも、それぞれに活動は、季節性を帯びたもので、決して個々独立したものではなかったはずである。そうした意味で、I類には多様な活動を反映した遺跡が含まれているわけであって、それぞれの遺跡には遺跡間の連鎖的なつながりが想定されるのである。

それでは、どのような関連性が推察されるのであろうか。

先ず、野原遺跡を取り上げなければならない（第20図）。それは、磨石・敲石（78%）の多さが際立ち、磨石・敲石を使った活動が活発だった可能性が高い、というように極めて季節性の強い内容の遺跡だったからである。磨石・敲石の他、その受け台としての石皿・台石も存在し、ドングリ類の処理に使用されたものであり、集中的な処理を考えるならば、秋から冬にかけての作業を行っていた可能性が高いのである。現に、出土位置が覆土の中位にあり、原位置を留めているものではないとはいっても、6号土坑中から126個の炭化種子（アカガシ）が出土したことはその可能性を示すものであろう。おそらくは、遺跡から検出された土坑の中には、ドングリ類の貯蔵穴が含まれていた可能性が高く、野原遺跡がドングリ類を収穫し、それを貯蔵しながら、次々に製粉処理していく集落であった可能性を示しているのである。

次に、逆瀬川遺跡を取り上げなければならない（第21図）。ここは、石錘（42%）の多さが際



第20図 野原縄文集落での活動

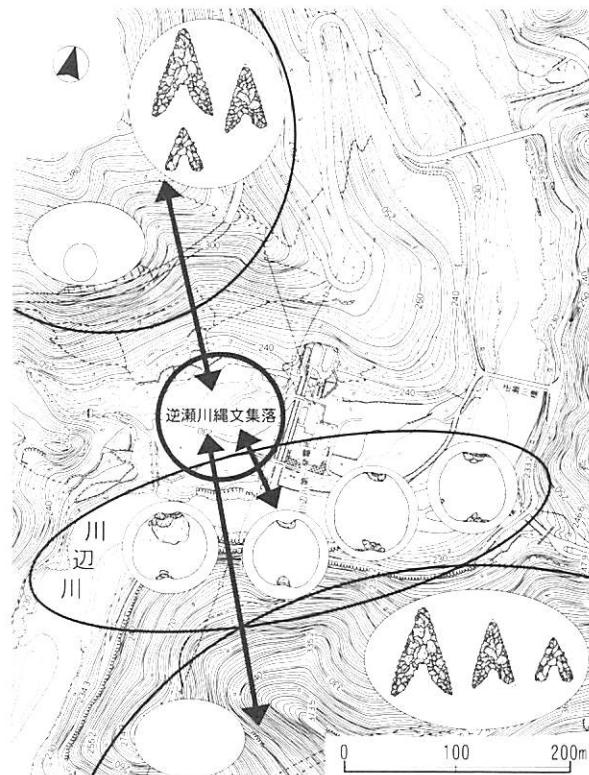
立ち、また石鏃（24%）や磨製石斧（12%）の出土点数が多く、石錐や石鏃、磨製石斧を使った活動が活発だった可能性が高い、という遺跡だった。石錐が多いことは、当地がV字谷の谷底である、という立地環境も勘案すれば、この集落のすぐ近くの川辺川で川魚漁が盛んに行われていた可能性を示唆しているようでもある。また、石鏃（24%）が一定比率で存在していることは、その集落の住人が狩猟をおこなっていた可能性を示唆してもいる。そうであるならば、アユやマス、ヤマメなどの川魚漁では6月から9月にかけての夏場ということになるだろうし、狩猟ではそれよりも前の冬場ということになるだろう。

さらに、V字谷の谷底に立地する小浜遺跡では、石錐（8%）が僅かであるのに対して、石鏃（25%）、磨製石斧（25%）、磨石・敲石（17%）が目立っているのである（第22図）。ドングリ類の処理が活発な秋から狩猟の季節である冬場の活動が行われていた可能性も高いのである。

このように、I b類の遺跡では、季節性を帯びた集落が含まれていた可能性を指摘できるように、複数の遺跡がセットとなって1年の活動が保証されていた、と考えられる。それは、それらの遺跡を縄文人たちが巡回していたことであり、その結果、石器相を異にするさまざまな遺跡がI b類として残された、と評価することができる。

さらに、I a類の遺跡では、その遺跡規模から判断しても、五木谷での中心的な集落であった可能性が高い。そこは、さらに川辺川の上流域に、さらに川辺川の下流域に、そして五木小川の上流域に、というように、3方向への活動展開の基点にでもなり得る位置にあたっていた。残念ながらこれまでの調査で、川辺川のさらに上流域と五木小川の上流域で、当該期の遺跡連鎖を窺わせる資料は得られていない。それは、同じような立地環境を擁する良好な土地が川沿いに点在する、さらに川辺川の上流域と五木小川の上流域である。このような推測は十分に可能であろう。ここにおいて、I a類の遺跡が当時の中心的な集落として選択されていた可能性は相当に高いもので、そこは3方向に展開した各縄文人たちのグループが決められた時期の一定期間に集合していた集落であった可能性が高い、と評価しておきたい。

以上のように、五木谷における中期から後期におけるI a類、I b類、II類という遺跡類型は、五木谷において展開した縄文社会の構図を示唆する可能性が高いものとして評価できる。



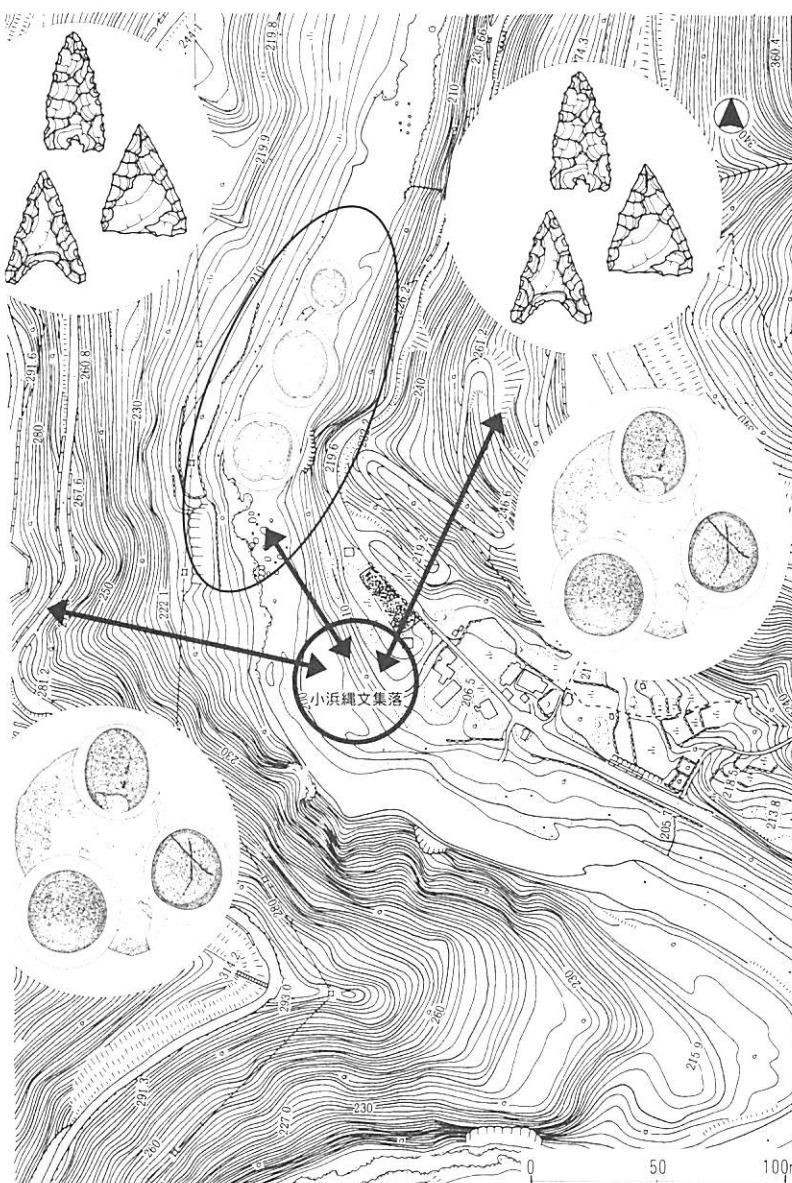
第21図 逆瀬川縄文集落での活動

その構図は、基点としての集落（I a類）から3方向に展開した縄文人たちが季節性を帶びた集落間の移動（I b類）を繰り返しながら、また基点としての集落（I a類）に回帰する、という季節性を帶びた移動と、それぞれの集落から出張っての活動（II類）によって成り立っていたと説明できる（第23図）。

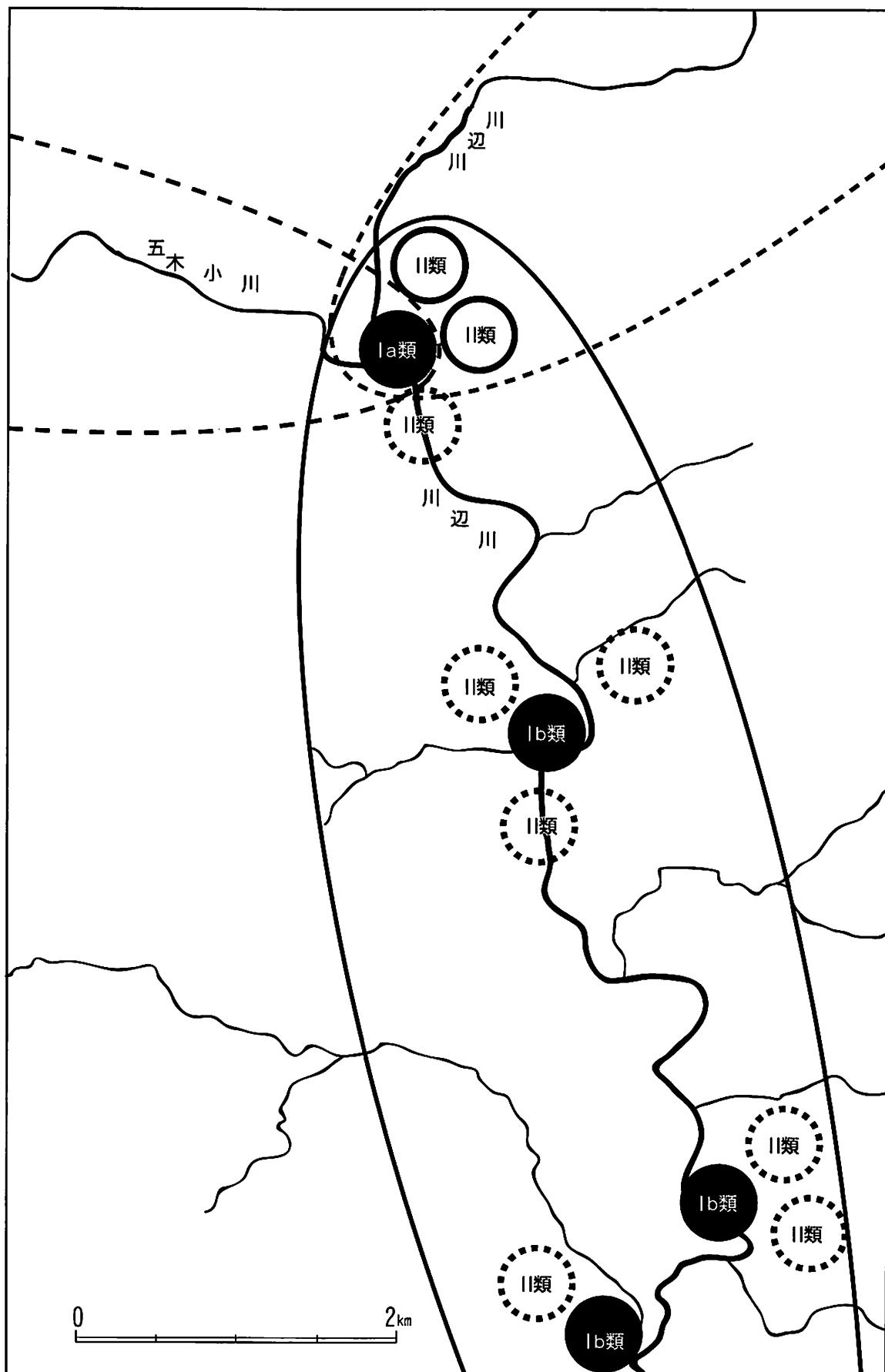
5 五木谷における中期～後期の集団構成と活動

先に、五木谷において展開した縄文社会の構図を示唆する可能性が高い、I a類、I b類、II類という遺跡類型について、基点としての集落（I a類）と、そこから分散、展開した縄文人たちの集落間の移動（I b類）、そして基点としての集落（I a類）への回帰、それぞれの集落から出張っての活動（II類）によって成り立っていた可能性を説明した。では、このような五木谷の縄文社会の集団構成をどのように推察することができるだろうか。

野原遺跡では、2基の竪穴式住居跡が25mの間隔をおいて遺構分布域の北端付近と南端付近で検出された。この住居跡の関係であるが、これは、同時併存か異時独立か、という集落構成上の問題と大きく係わる問題である。決定的なことはいえないが、竪穴式住居跡の間に多数の遺構群が配置されていること、土器廃棄場として利用されていた谷部を介して南北方向に離れていることから、ここでは、それぞれ異時独立と理解しておきたい。つまり、この集落は、1つの竪穴式住居跡と複数の貯蔵穴、墓によって構成されていた、と考えられるのである。



第22図 小浜縄文集落での活動



第23図 五木谷における縄文集落の展開

逆瀬川遺跡では、5～6基の竪穴式住居跡が検出された。これらの竪穴式住居跡については、直径15mの範囲内に集中するもので、その位置関係からもすべて同時併存とは考えられない。決定的なことはいえないが、異時独立か2基程度の同時併存を想定することがもっとも自然であろう。

このように、I b類の集落は、遺構の数から判断するに、1～2基の竪穴式住居に居住する人数の縄文人たちによって構成されていたものと考えられる。おそらくは10人を越えない数であったに違いない。

一方、このI b類の集落の縄文人们は、I a類の集落に回帰し、集合していた。先に推定したように、合流地点のさらに上流域の川辺川、さらに下流域の川辺川、そして五木小川、という3方向に分散、展開していた3つのグループがI a類の集落に回帰し、集合した場合、その集団の規模は、20人前後の数となったものと考えられる。そこで、これをもって、五木谷の中期～後期の基本的で単位的な集団であったと考えておきたい^{註3)}。

以上のことまとめ、当時の集団構成と活動内容を再度整理しておきたい。

五木谷には、20人前後の規模の基本的で単位的な集団が活動していたものと考えられる。彼らの本拠としていた集落（I a類）は、川辺川と五木小川との合流点近くの谷部の広い河岸段丘上にあった。そこは、3つの谷が落ち合う場所である。彼らの目には、それぞれの川筋に広がる、縄文人们の生活を保証する環境が映っていたはずである。

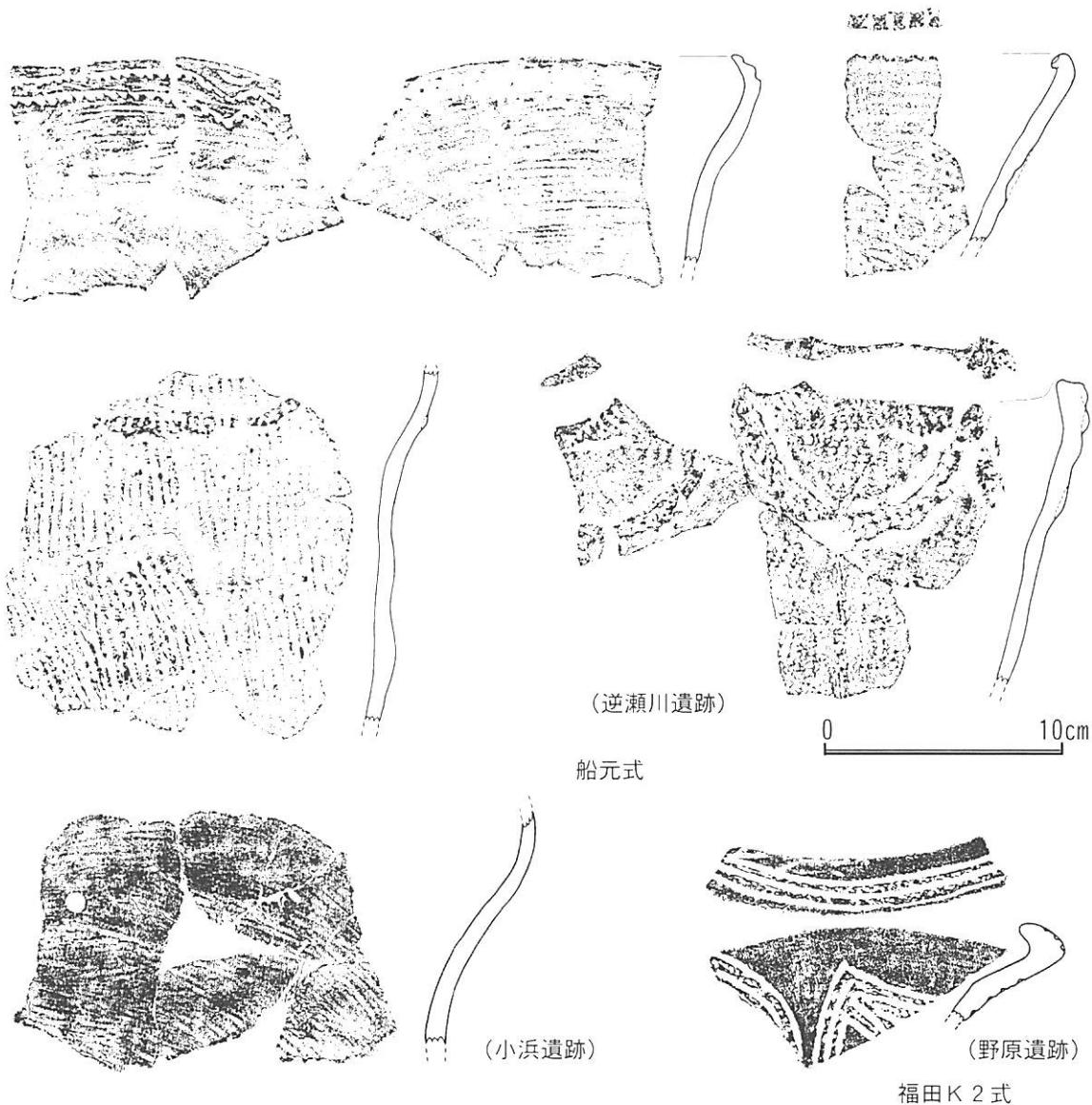
I a類の集落の縄文人们は、3つのグループに分散して、そうした川筋を遡ったり、下ったりしていったのだろう。その3つのグループの規模は、1～2基の竪穴式住居で生活できる程度のもので、10人を越えないものであったと考えられる。それぞれの川筋の縄文人们は、アユやマス、ヤマメなどの川魚漁、狩猟、ドングリ類の採集と製粉作業など、季節的な活動ごとに居住する集落（I b類）を変えながら暮らしていた。また、僅かな遺物しか出土しない遺跡があるように、彼らは、集落周辺の土地（II類）でこうした諸々の活動を行っていたようでもある。遺物が出土する、出土しないにかかわらず、そこここが彼らの活動の場であったに違いないから、集落周辺にはたくさんの、こうした派生的な活動地（II類）があったのであろう。そして、彼らの活動が終了すれば、3つのグループは、再度、本拠としていた集落（I a類）に集合したものと考えられる。

少なくとも、彼らの集落は五木谷全域であった。彼らは、そこを周回移動する活動を展開していた。いわば領域内定住（木崎2003）という、九州石槍文化（木崎1996a、b、c）で展開した活動を彷彿とさせるものである。少なくとも、1年を越えて、一定地に同じ集団が居住する定住という居住様式を五木谷の縄文社会には、当てはめられそうにないのである。「定住社会＝縄文社会」という一般論では決して片付けられない縄文社会が、五木谷で展開されていた可能性が高いことは、極めて興味深い。

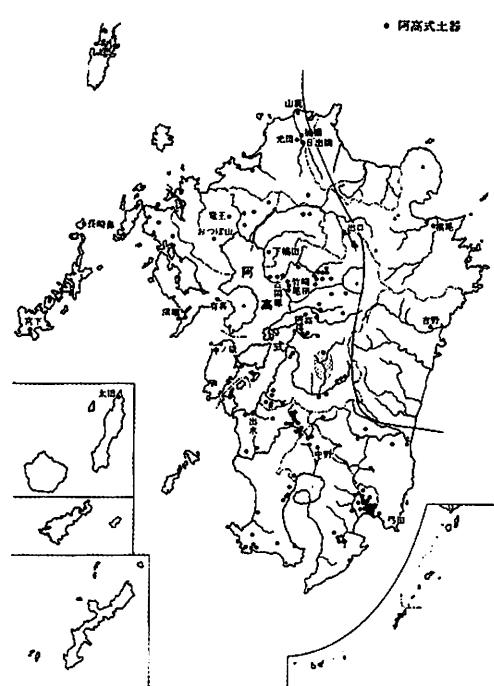
6 おわりに

五木谷全域を集落として、そこを周回移動する活動を展開していた、いわば領域内定住をしていた縄文人たちがいたと考えられる。彼らの生活は、とても狭い範囲に繰り広げられていたが、優れて機能的で、効率的なものであった。そのことを提起することが本稿の目的であった。

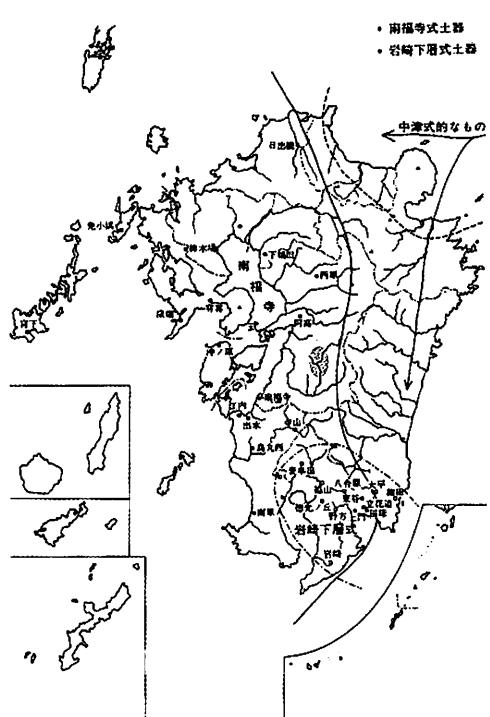
一方、五木谷の当該期の土器型式には、阿高式、南福寺式、出水式、北久根山式、市来式などの九州地方の土器の他に、船元式や福田K 2式などの瀬戸内地方の土器（第24図）も僅かながら含まれている。広域的な文物の流入が認められるのである（第25図）。また、チャート、粘板岩、千枚岩、砂岩、頁岩、凝灰岩、泥岩のような、川筋の河原で容易に採取可能な石材の他に、鹿児島県出水市の日東周辺でしか採取できない黒曜石や、五木谷の上流の峠を越えた熊本県東陽村などで採取できる蛇紋岩などが石器石材に利用されているのである（第26図）。これら



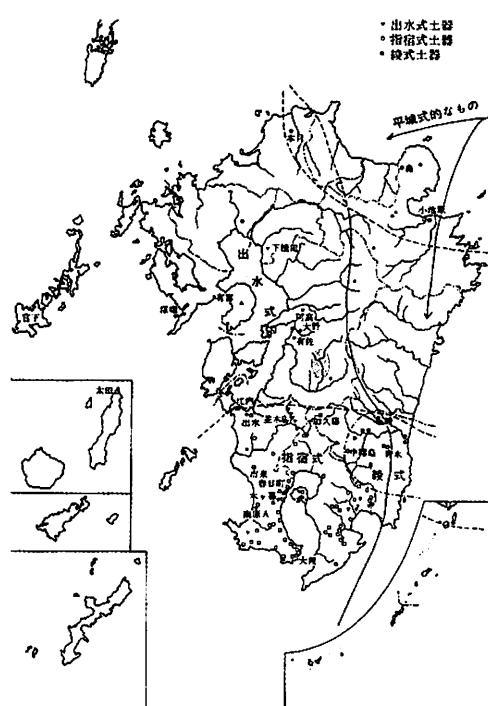
第24図 五木谷の瀬戸内系土器



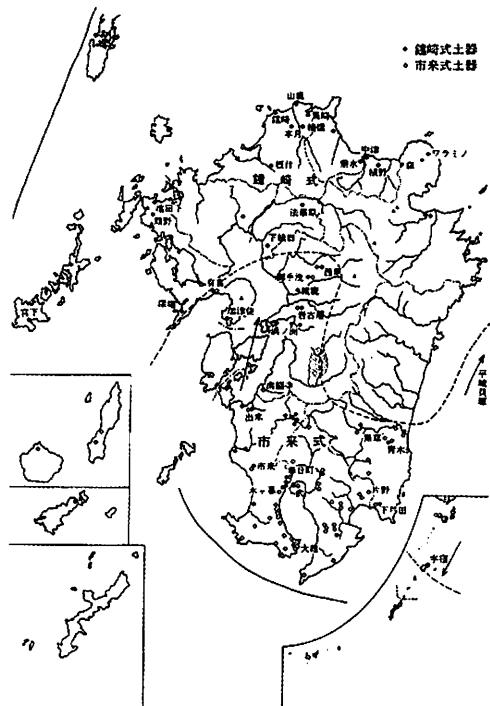
阿高式土器の分布



南福寺式土器の分布



出水式、綾式、指宿式土器の分布

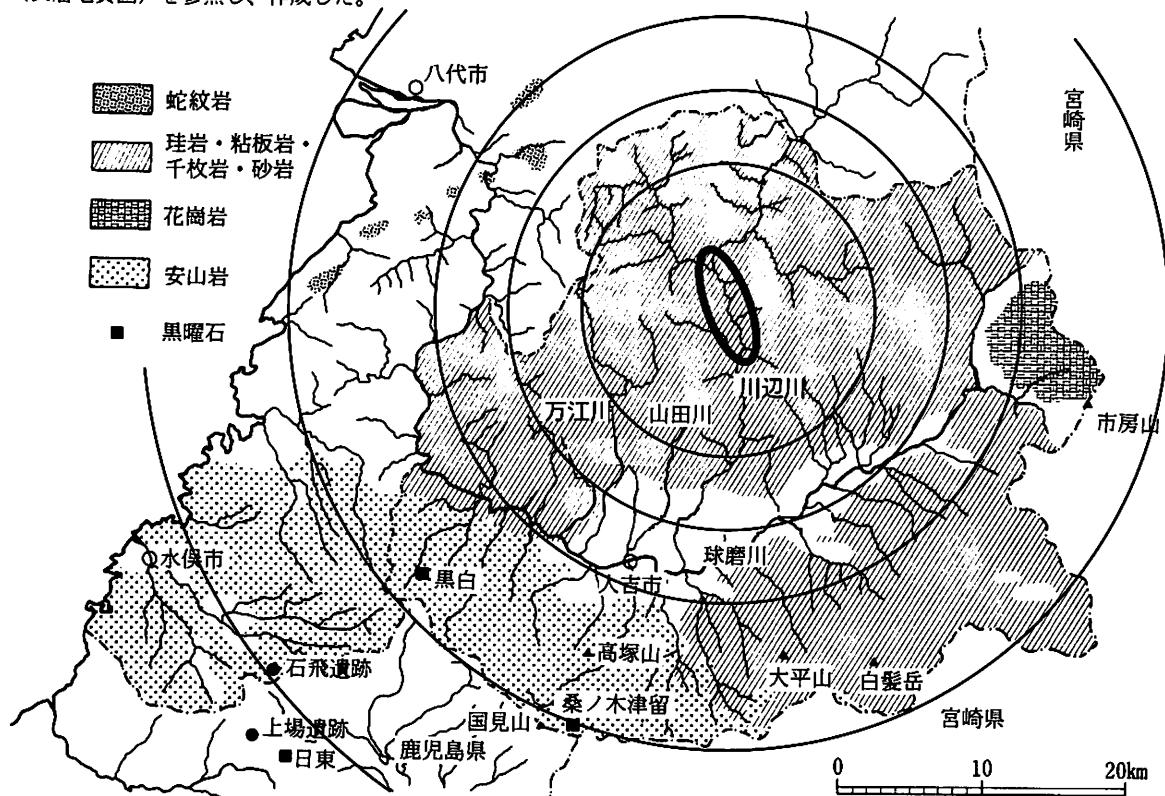


錦崎式、市来式土器の分布

前川威洋『九州縄文文化の研究』(1979) 所収の挿図を基に、作成した。

第25図 中期後半～後期前半の各型式土器の九州内分布

熊本県発行の「球磨川流域地域環境利用ガイド」
(表層地質図) を参照し、作成した。



第26図 石器石材の分布 (熊本県教育委員会1987を一部改変)

は、五木谷という狭い範囲に領域内定住をしていた縄文人たちのネットワークが如何に広いものであったのかを窺わせてくれる、とても興味深いものである。

おそらくその上位にはさらに大きな単位の集団群の存在が想定される。こうした集団群の中で、五木谷の単位的な集団は、遠方の土器なり、石器石材なり入手していったものと考えられる。さらに大きな単位の集団群の本拠地がどこにあったのかは依然不明であるが、縄文社会を考えるうえで、それに関する研究もまた欠かせないものであろう。

今後は、五木谷の当該期の土器相を技術論的に詳細に検討すると共に、そうした成果を近隣の地域のものと比較検討する必要があるだろう。また、石器石材の原産地と石器石材の利用傾向を詳細に検討すると共に、そうした成果を近隣の地域のものと比較検討する必要があるだろう。その中で、さらに大きな単位の集団群の範囲が具体的にどのように広がっていたのかが明らかになってくるものと期待される。

【謝辞】平成15年度企画展示『肥後の至宝展Ⅱ 球磨樂展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』の企画・開催という機会が与えられなければ、本稿を起稿することは無かった。本稿を閉じるにあたって、御芳名を掲げて、感謝の意を表したい。

北川賢次郎、清田純一、古屋松硬子、渋谷敦、高田睦子、高田剣、鶴嶋俊彦、出合光宏、

原田正史、福原博信、帆足俊文、前田一洋、和田好史、江本直、角田賢治、池田朋生、吉里美枝子、大友由紀、人吉市教育委員会、相良村教育委員会、五木村教育委員会、山江村教育委員会、あさぎり町教育委員会、城南町教育委員会（敬称略）

註1 熊本県教育委員会の帆足俊文氏の御教示による。

註2 五木村教育委員会の福原博信氏の御教示による。

註3 熊本県狸谷遺跡の報告や論文の中で、縄文時代早期における基本的で単位的な集団について、2～3の世帯によっていた可能性があることを指摘しておいた（熊本県教育委員会1987、木崎2004）。五木谷の中期～後期においても3つのグループによる基本的で単位的な集団であり、共通するところがある。

参考文献

- 五木村教育委員会1995『野々脇遺跡』
木村教育委員会1997『頭地田口B遺跡』
五木村教育委員会1998『小浜遺跡』
五木村教育委員会2003『逆瀬川遺跡』
木崎康弘1996a「九州地方の様相について－九州石槍文化の成立と展開－」『石器文化研究』6
木崎康弘1996b「九州石槍文化の展開と細石器文化の出現」（『九州旧石器』3（1997）再掲載）
木崎康弘1996c「石槍の出現と気候寒冷化－地域文化としての九州石槍文化の提唱－」『旧石器考古学』53
木崎康弘2003「ナイフ形石器文化集団研究序論－石器文化の類型とその評価－」『旧石器人たちの活動をさぐる－日本と韓国の旧石器研究から－』
木崎康弘2004「ナイフ形石器文化における定住化と祭祀」（現在、投稿中）
熊本県教育委員会1987『狸谷遺跡』
熊本県教育委員会2002『頭地田口A遺跡』
熊本県立装飾古墳館2004『肥後の至宝展Ⅱ 球磨樂展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』
古環境研究所2003「第IV章 野原遺跡における自然科学分析」
小林久雄1968「肥後国球磨郡五木村頭地下手遺跡」『九州縄文土器の研究』
相良村教育委員会2003『野原遺跡Ⅰ』
田辺哲夫編1980『熊本の上代遺跡』熊本日日新聞社